

江戸名所図會

二十

オ
二三八
冊

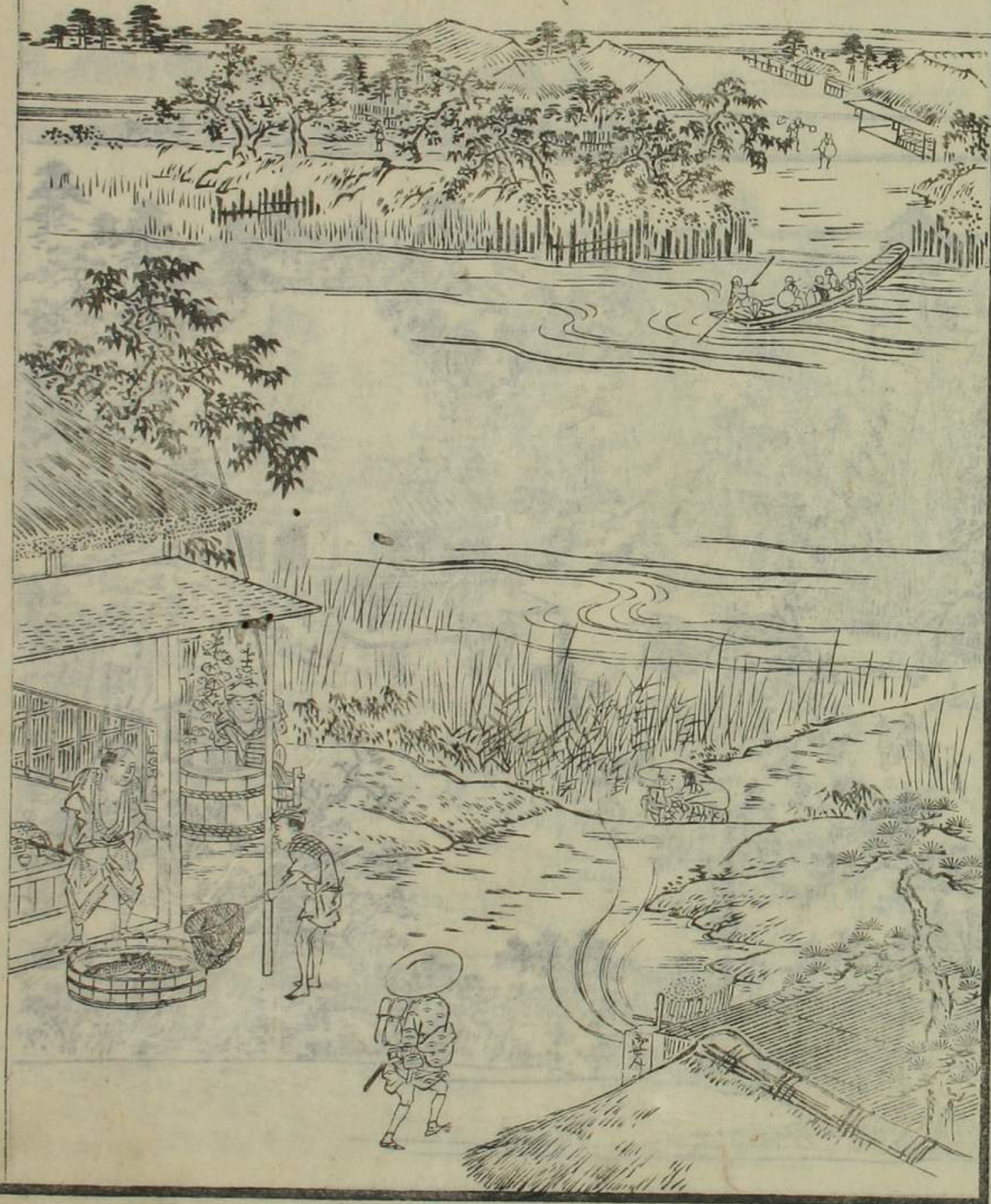
ル4
5105
20



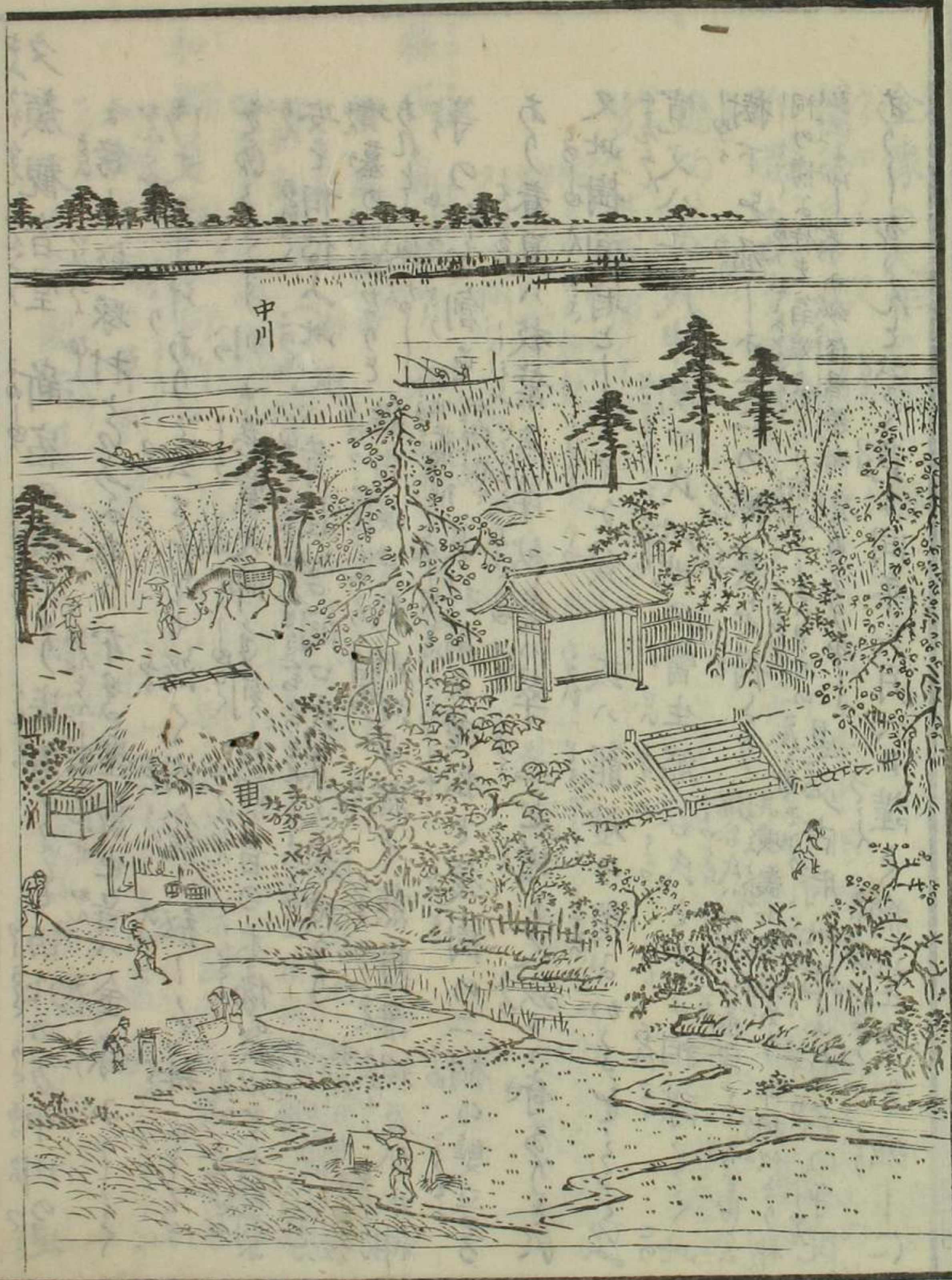


門 4
號 5105
卷 20

新宿 渡口
松街道
川
魚有
所
中
鯉魚
産
味
美



昭和41年12月20日寄
原安三郎氏贈



夕顔観音堂 新宿の渡口より半道より西北の方中川の堤

傍く飯塚村とありありなる聖観世音ハ金像あり

深丈五寸許ありと云されとも深く内舎龍に秘して拜せり

をゆきす別は慈覚大師の刻の観音の木像を以て合龍前

安を相傳ふ此地ハ昔莊官関口氏某の采地あり

墳墓の旧址なりと 往古関口氏此地に就く熊野権現及び水神

等の社を創せ 此叢祠 其社前は老松と榎樹の二樹の雙立あり

あり春夏ハ枝葉焦悴秋冬ハ翠色を増せ人以此奇ありと云

又此樹間時と云く光を發し或ハ龍燈の梢にかゝると云

寛文八年戊申関口氏此地の醫生深谷氏と共に相謀り此

樹下を堀り一二の佛具を得たり

弘法大師の住を箱温素より信心やまき目蓮の是必古時此地は有名の寺院

あり一ありんと云く竟は同年六月六日謹く猶此土中を堀りに

金像の大非の像一軀を獲り 佛像背面は弘長三年二月仍直小

深谷氏の家に移し假し佛壇に安を相好端嚴実は凡工の

所造よりなるあり然るに前宵深谷氏老翁媪共夢の

應ありを以て奇ありと云く竟は此地を闢く草堂を

營は此靈像を遷し

按は世は夕顔観音の像ハ執凡の中より出現し

紫式部の念持佛なりともいひ傳へり此地の像起り

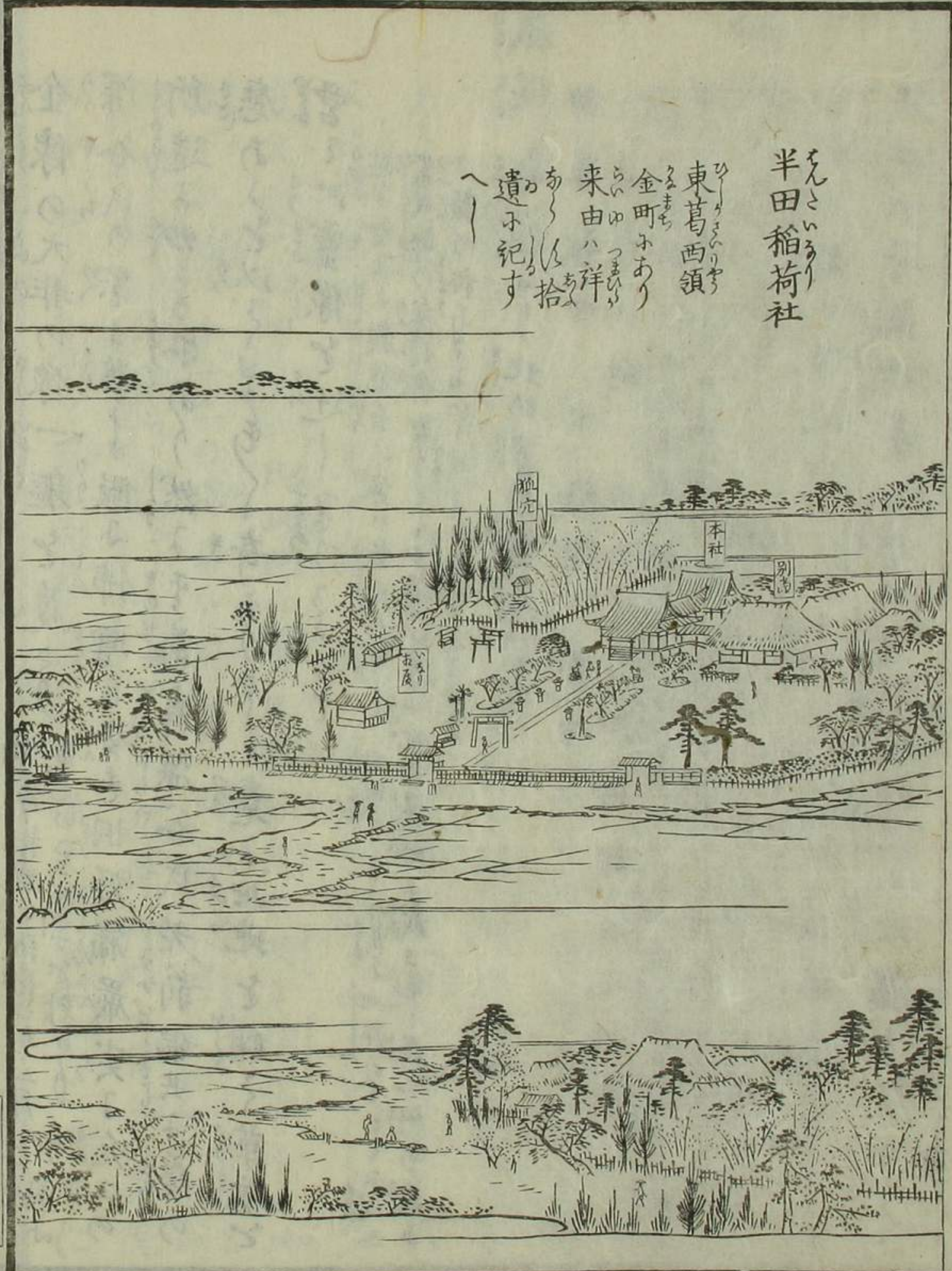
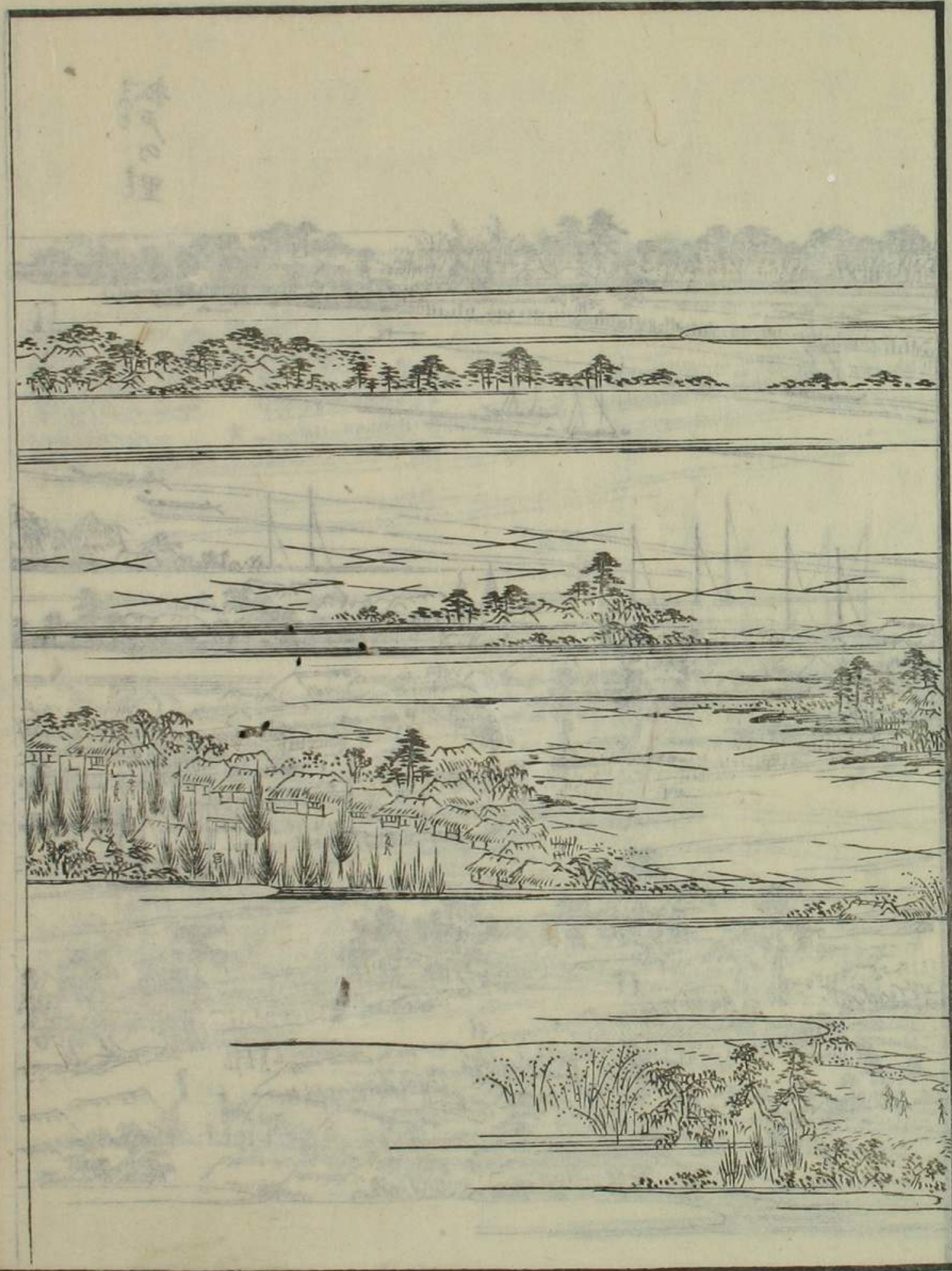
猿侯 新宿より北の方の邑名なり

神鳳 抄曰 下總國 葛西 新御厨在之 云云

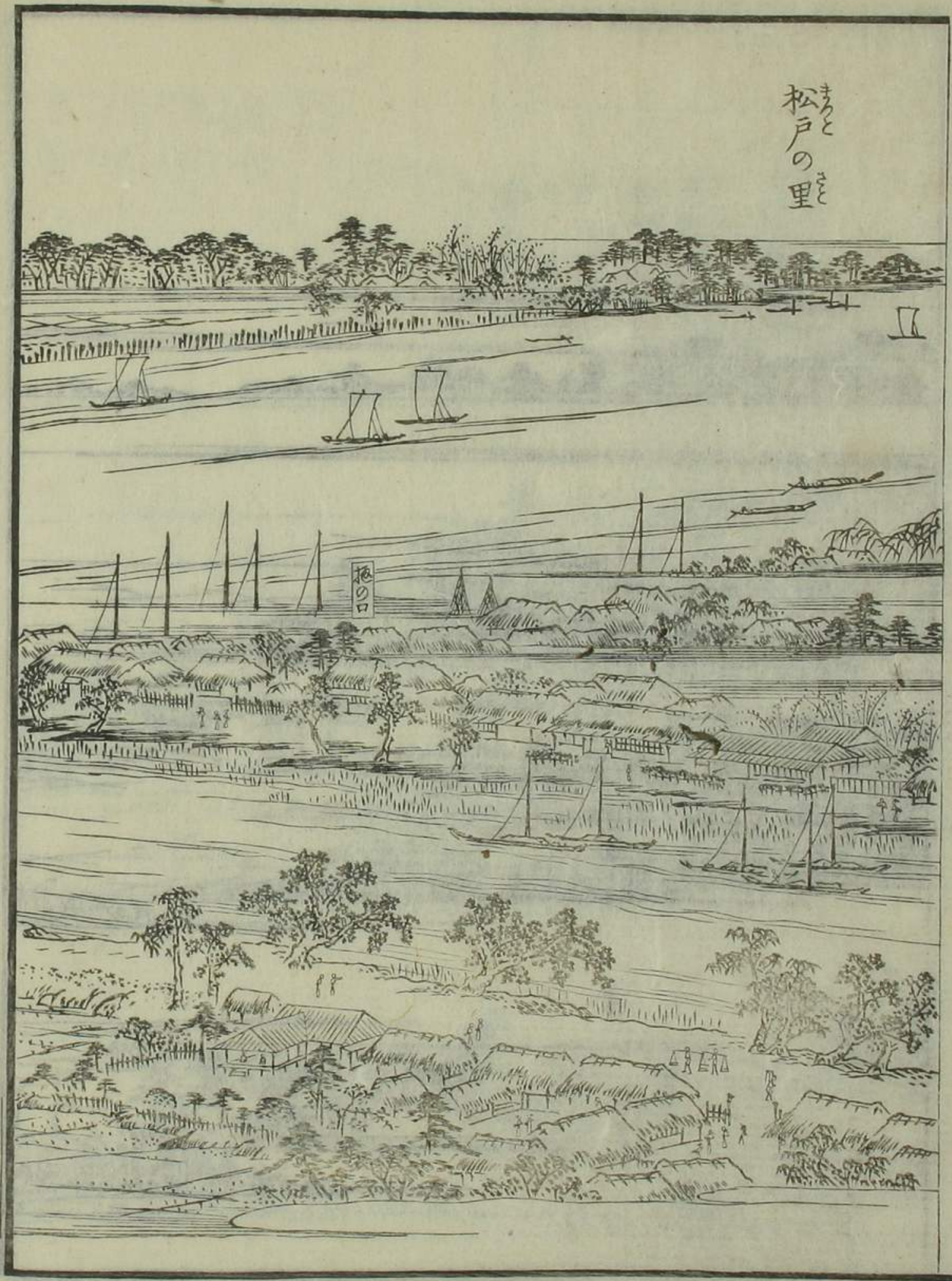
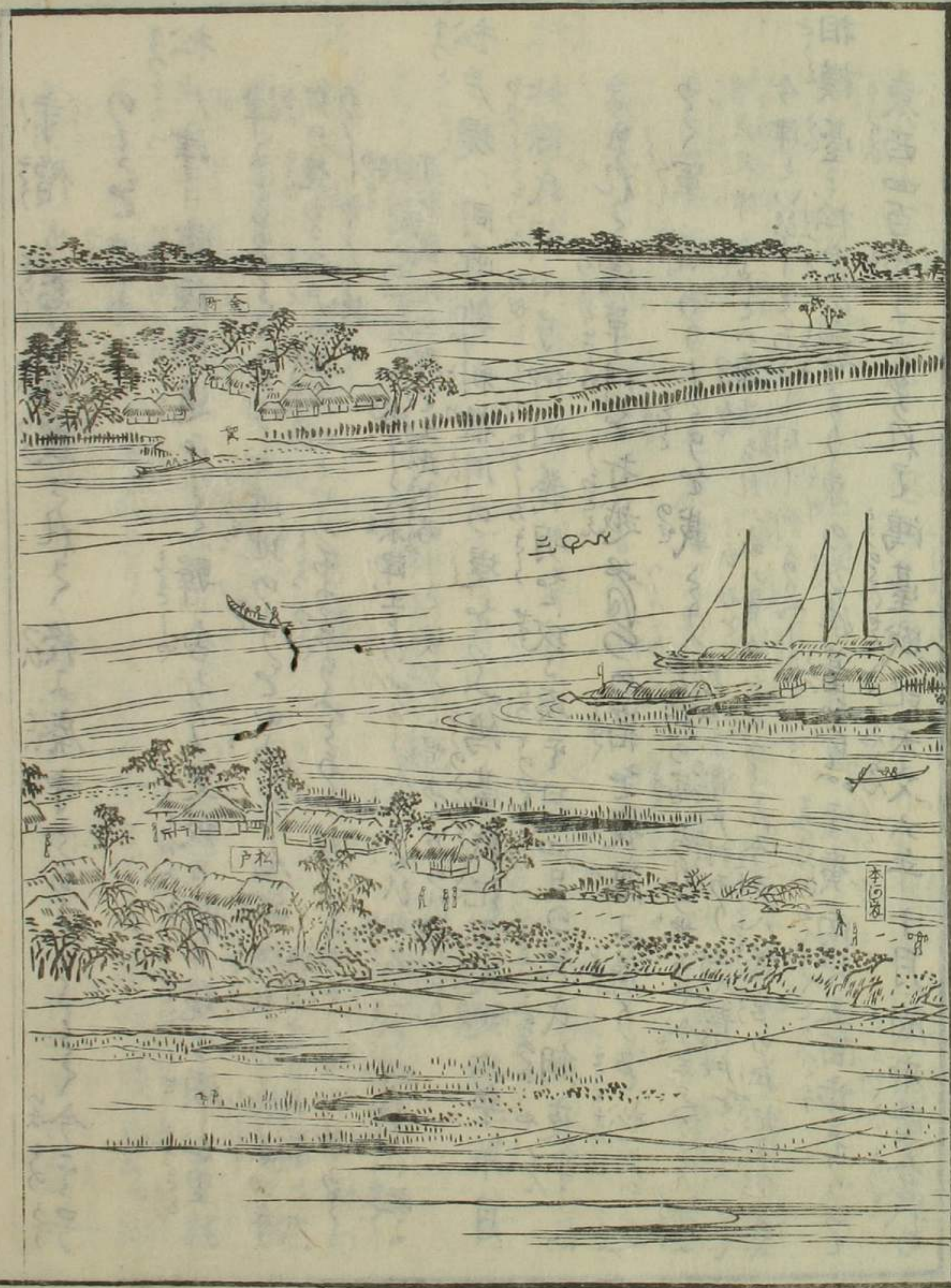
和銅寺廢址同所あり 佛生山と号し

和銅年間の草創ありと云傳ふ中古迄も伽藍巍々あり

天文六年國府臺合戦の時兵火の爲ふ灰燼となり



半田稻荷社
 東葛西領
 金町あり
 来由ハ詳
 遺小紀す
 拾



寺僧も悉く逃殺され終に廢寺となり今其号のを傳ふ

松戸津 常陸街道中々驛舎あり更級日記に鏡の瀬松里此

津よりありとある此地の所をいふ人歟義経紀は治承四年九月十日武蔵と下総の境あり松戸の庄市河とりの所なるありむら松戸の庄の名ありあり

松戸堤 同所新利根川の堤をいふ鴻基戦記に天文六年十月

北條氏綱小弓所義明を攻了頃正月四日の夜氏綱夜半に

まきれ浅草川を打越つての宿を夜深に通り色松戸の堤

相模墓 松戸の驛より東の方此墓をいふ廣南北五百歩あり

条下は松戸の川を打越し陣の内よりも推津村上堀江鹿島と

始として五十騎と相模墓に打揚敵の人数を見合はせあり

小弓所曹子墓 鴻基戦記義明滅亡の条下は乳母レンセイとい

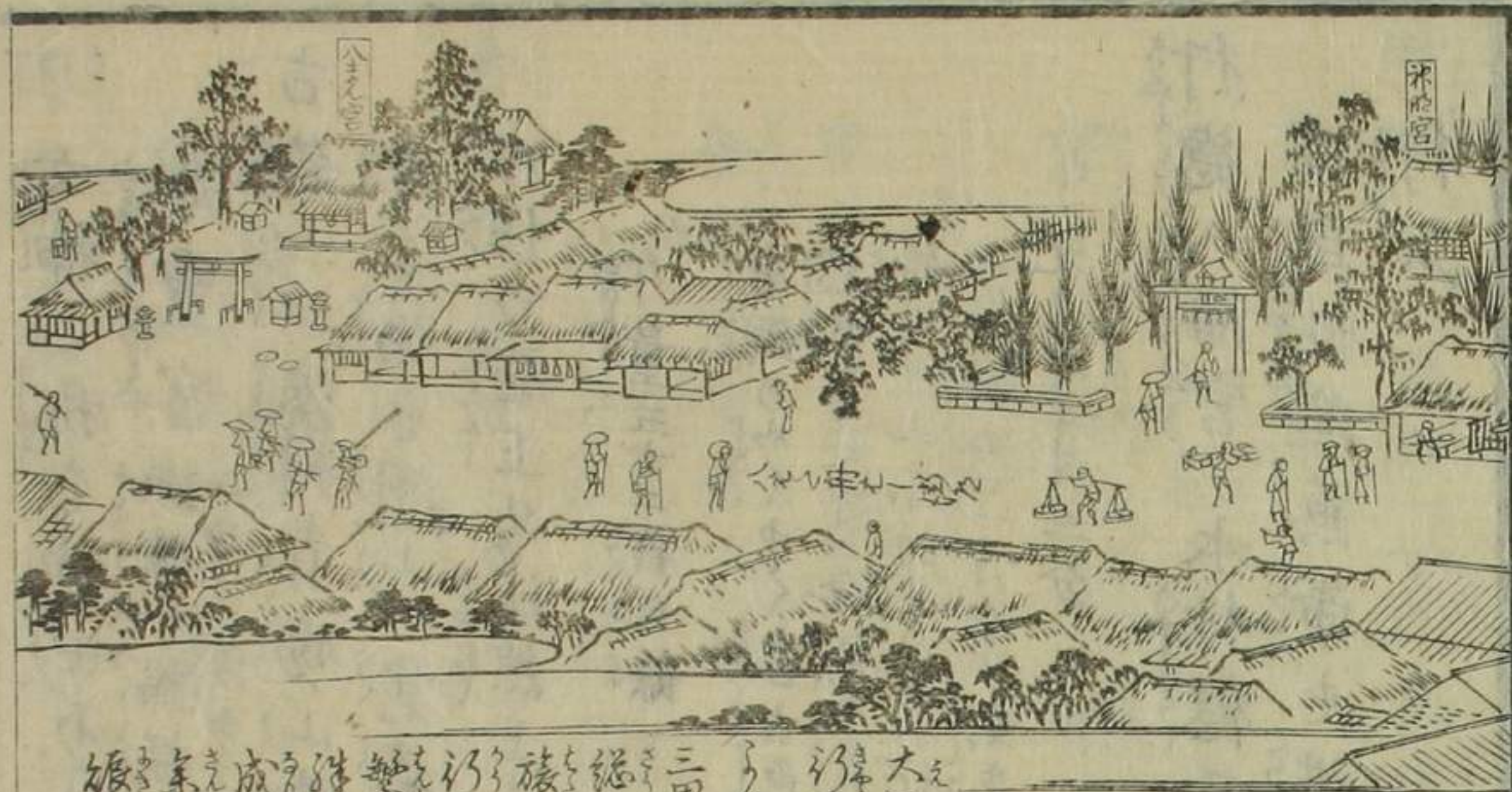
行徳船場 行徳四丁目の河岸なり土人新河岸と唱へ旅舎あり

辨財天祠 同所四五町下の方湊村にあり昔ハ潮除堤の松林の

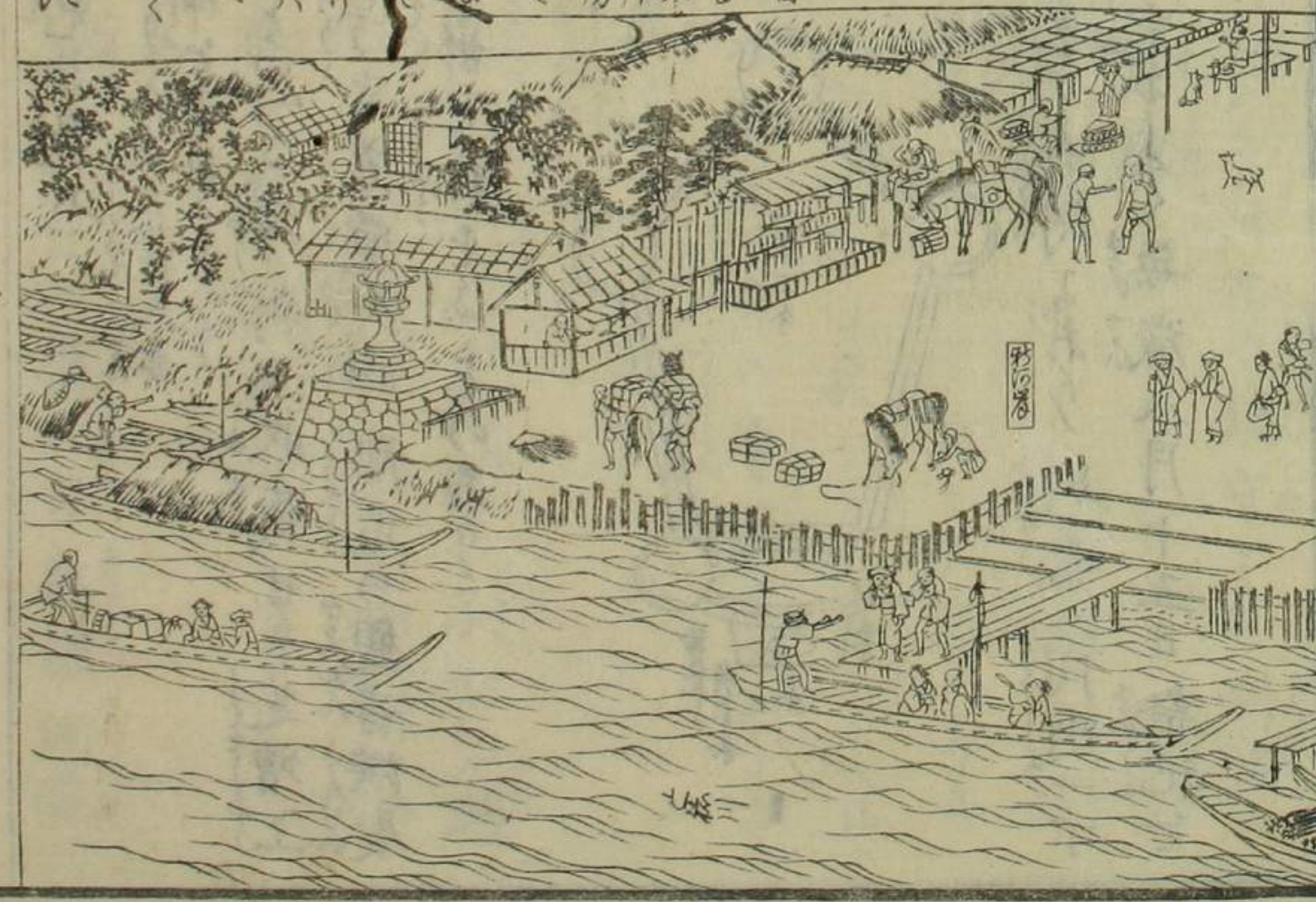
江戸青山梅窓院の順譽唯然和尚此神の靈尔より享保

三年戊戌宮居を建立ありといふ祭るゆを藝州嚴島の海神

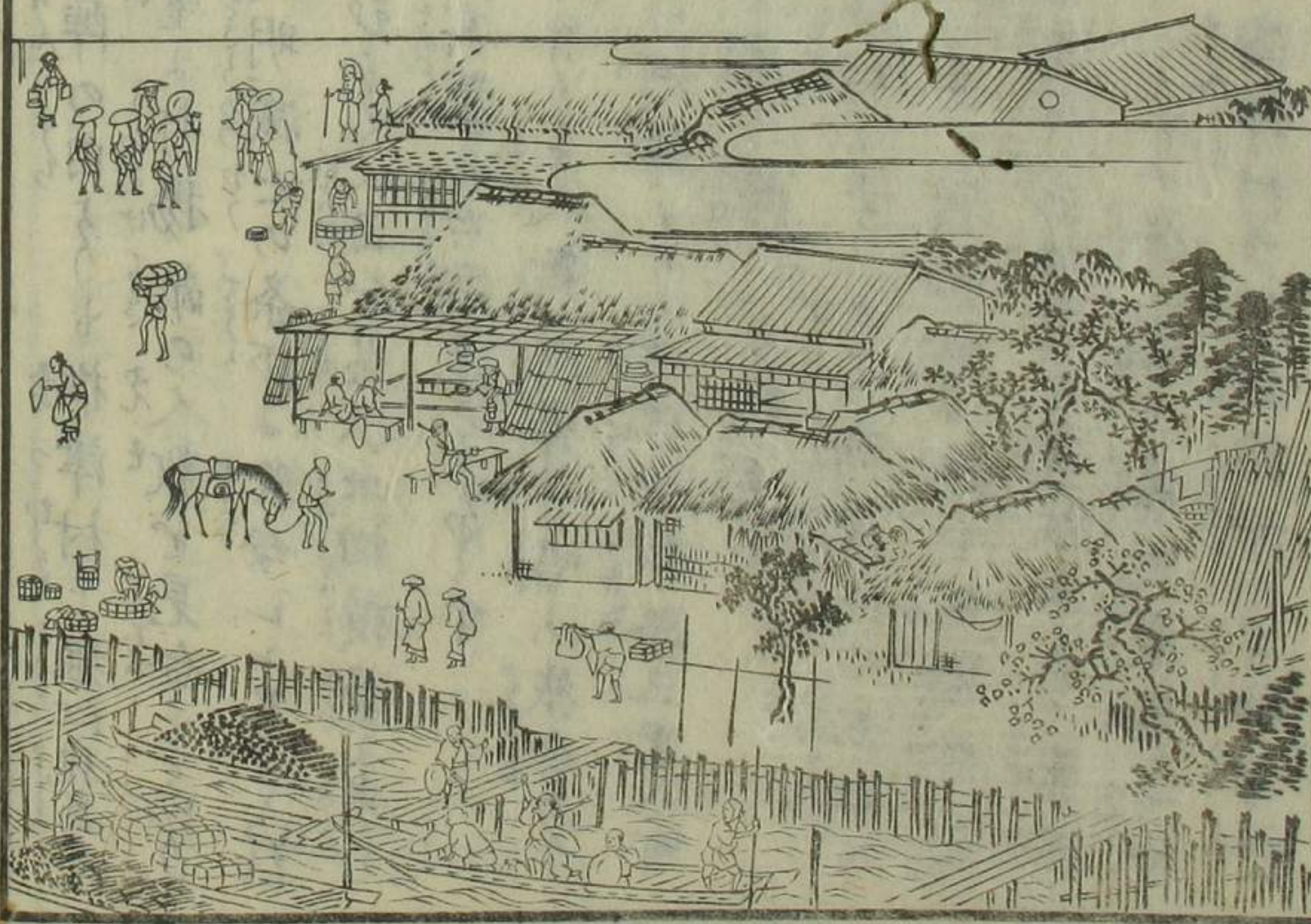
小同く市杵島姫神中々海神村の阿諏訪神ハ男神尚社ハ



大江戸小細町三日
 三里八丁あり房
 三の張跡ふし
 旅亭ありあま
 行人絡繹と
 繁昌の地なり
 成田不動尊へ
 参詣の人夥し
 賑ひ大方



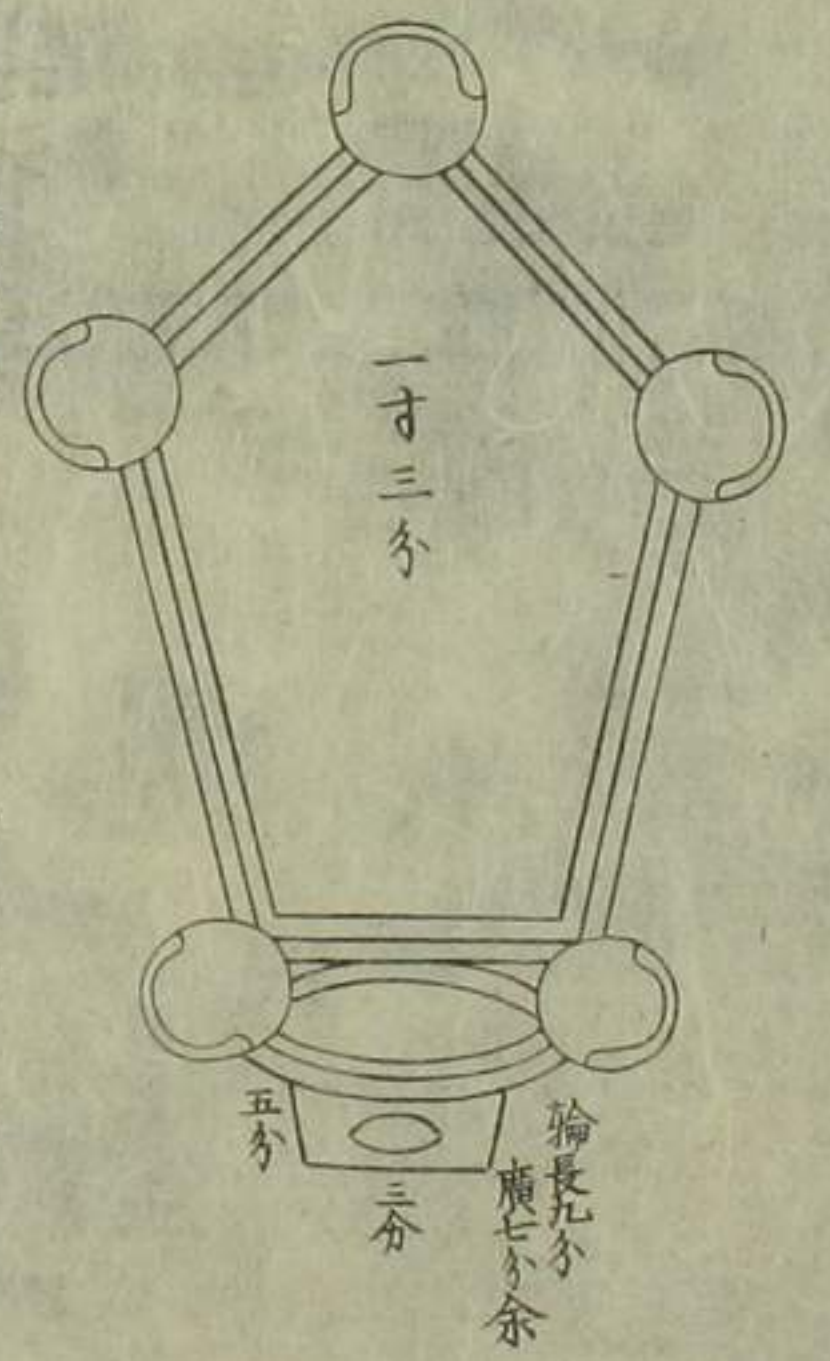
行徳家船場



女神と称す神田あり弁天免と唱ふ
 船靈宮 画像一幅探信の事あり古此地大船
 古鈴一口湊村青陽山善照寺とす浄刹は収蔵せり芝増上
 寺は属を開山八覚上人と号す慈覚大師彫造の観音湛慶
 の作の焰王又法然上人鑑御影と称するものあり

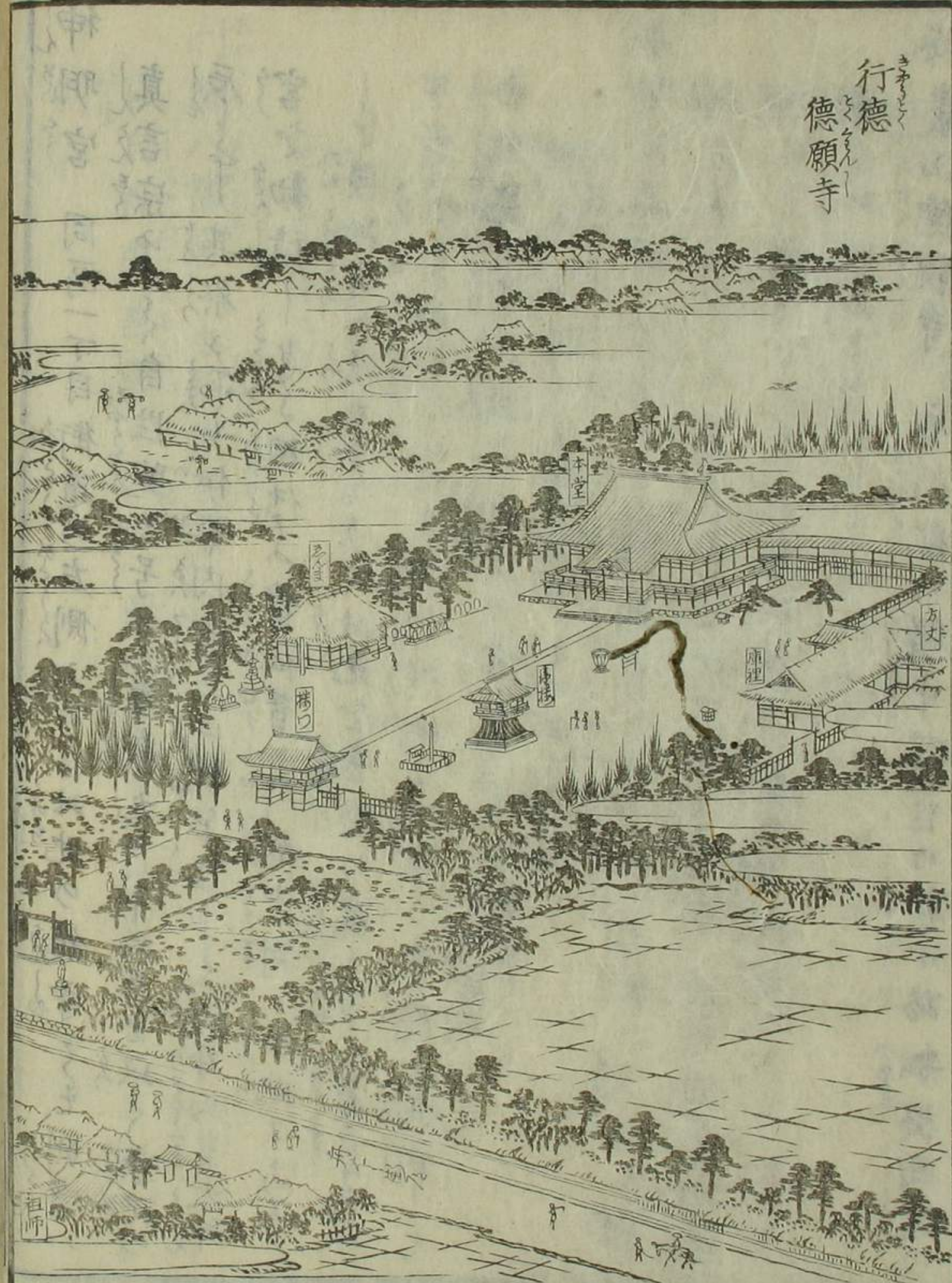
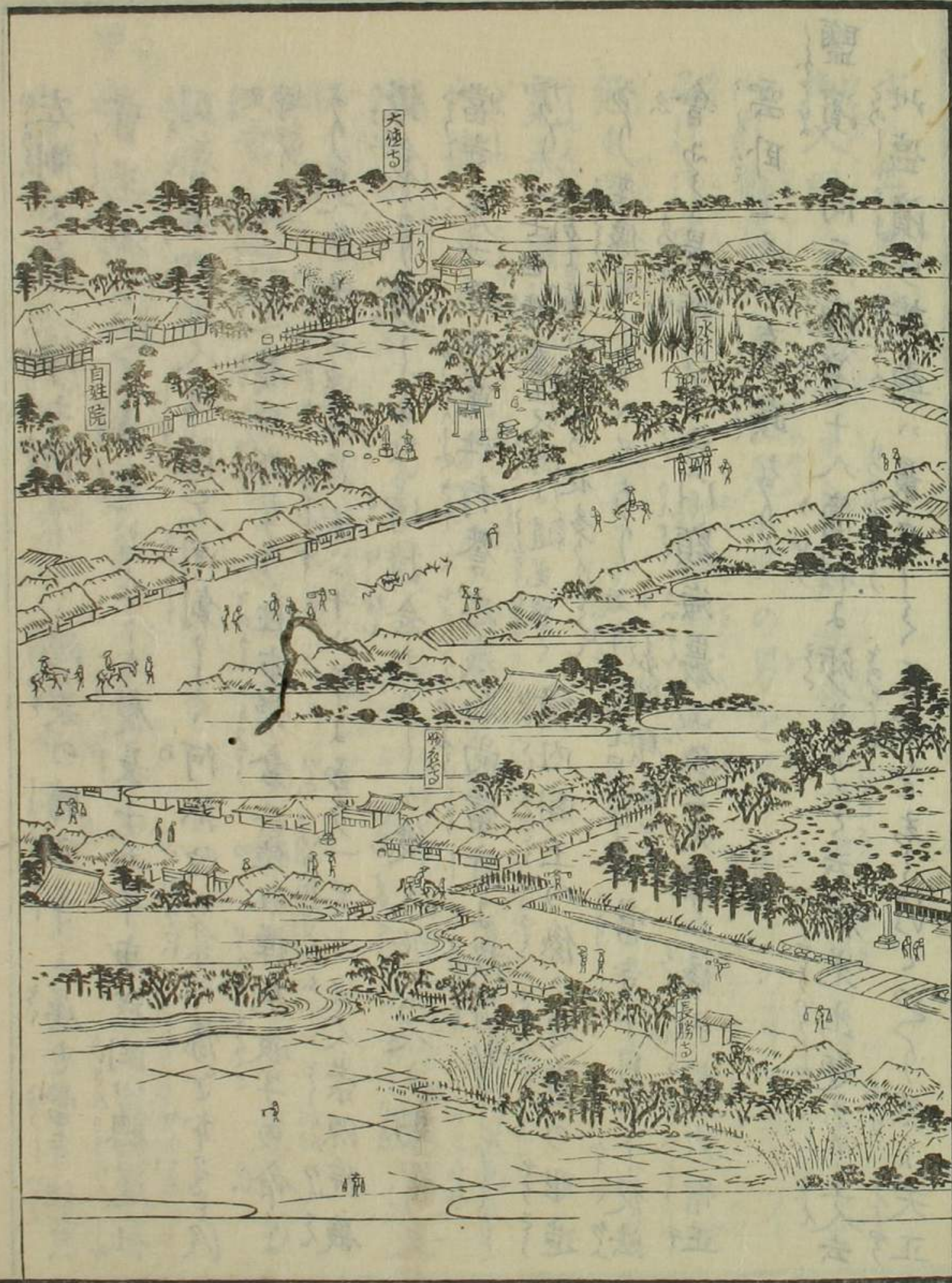
斤量五十二錢目餘

唐銅のゆくあり甚古色あり
 惣長サ三寸二分刻の裏延板
 鈴大サ三寸回り内小石一宛
 あり鈴の口一寸八分刻先より
 元まで二寸三分



行徳八幡宮 本行徳三丁目道より右側あり別當八同所一丁
 目自性院兼帯此地の鎮守中々毎歳八月十五日祭祀を
 行ふ

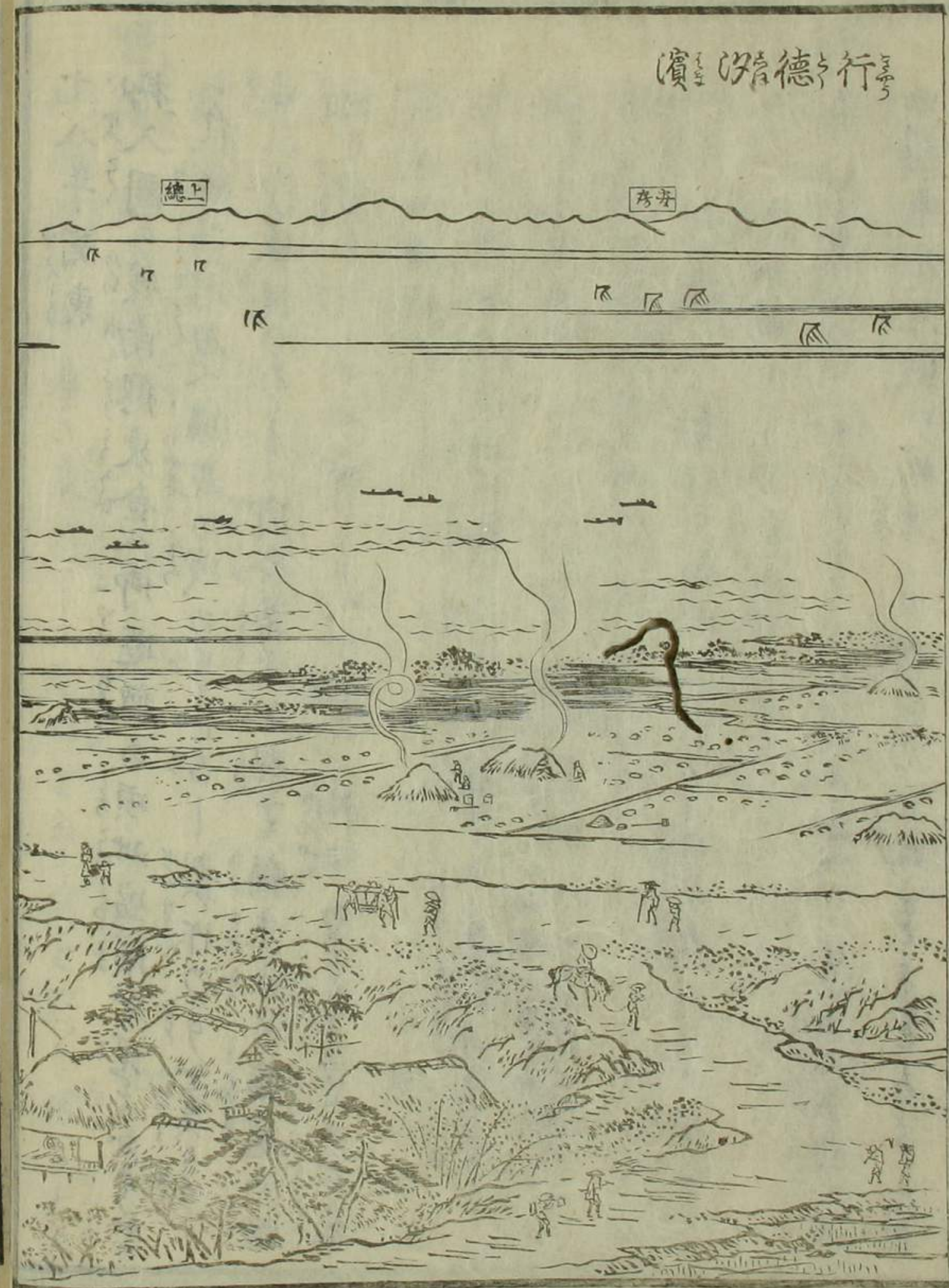
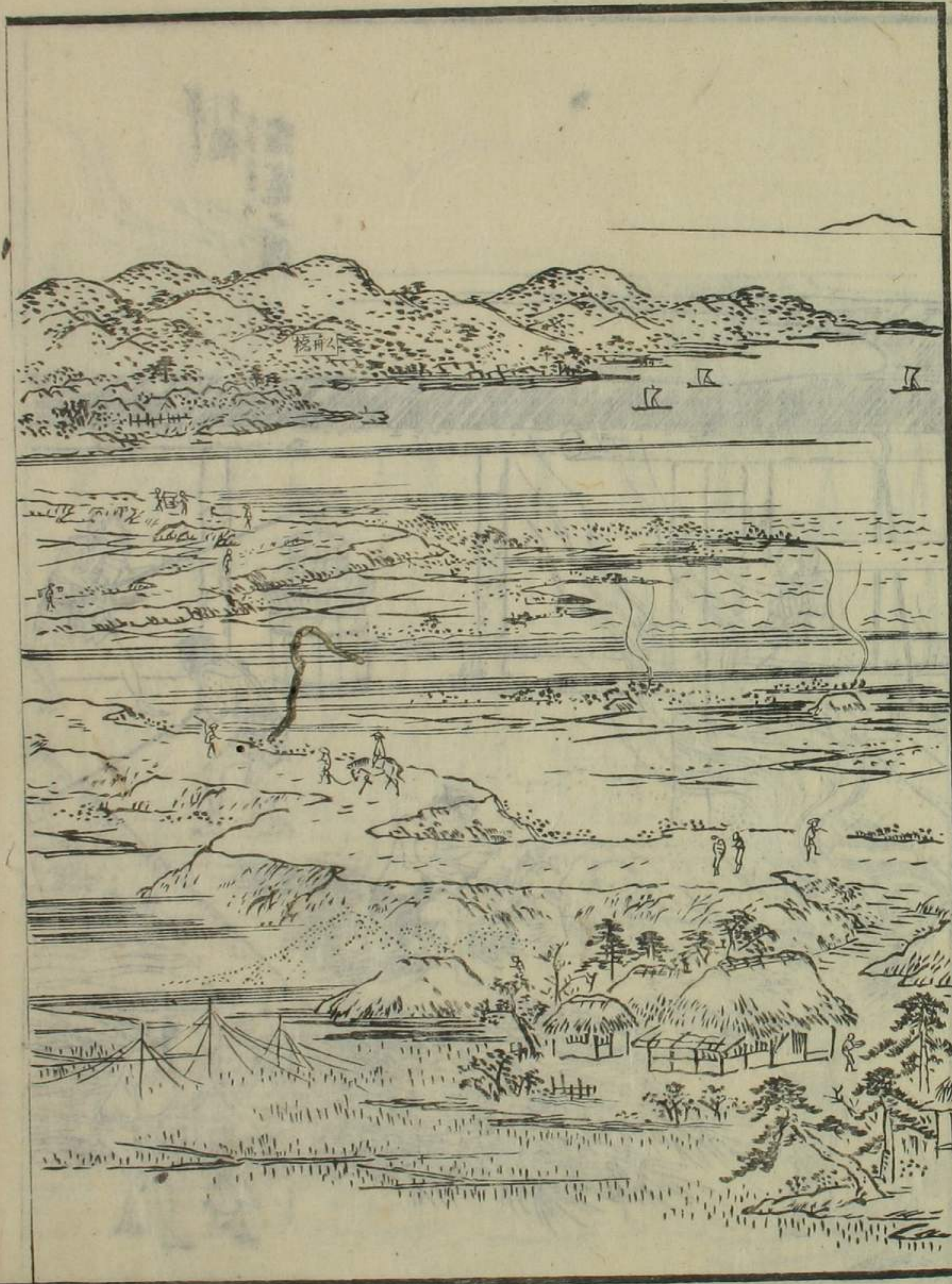
神明宮 同所一丁目街道の左側あり此地の鎮守とす別當ハ
 真言宗より自性院と号す毎歳九月十六日を以て祭祀の
 辰とす其祭の所を伊勢内宮の土砂を迂して内外両皇大神
 宮を勧請して相傳ふ當社昔ハ川向中洲と云地はあり
 一と後此所へ迂せり又此地を金海の森と号く慶長十九年
 甲寅金海法印とす沙門此地は一字の寺院を開創して
 金剛院と号し依る金海の森とのありを
 按て葛西志とす書は行徳ハ金剛院の開山某
 行徳の地とす一ハ地名とす由記せり
 金剛院廢址 當寺より南の方あり市街屋敷と字せり是
 則先よつて此の金剛院の旧地なり金剛院ハ羽州羽黒山法
 漸寺は属せり其昔行徳有驗の山伏住りしにあり
 竟此地名とあり云傳ふ
 海巖山徳願寺 本行徳の驛中一丁目の横小路船橋間道の

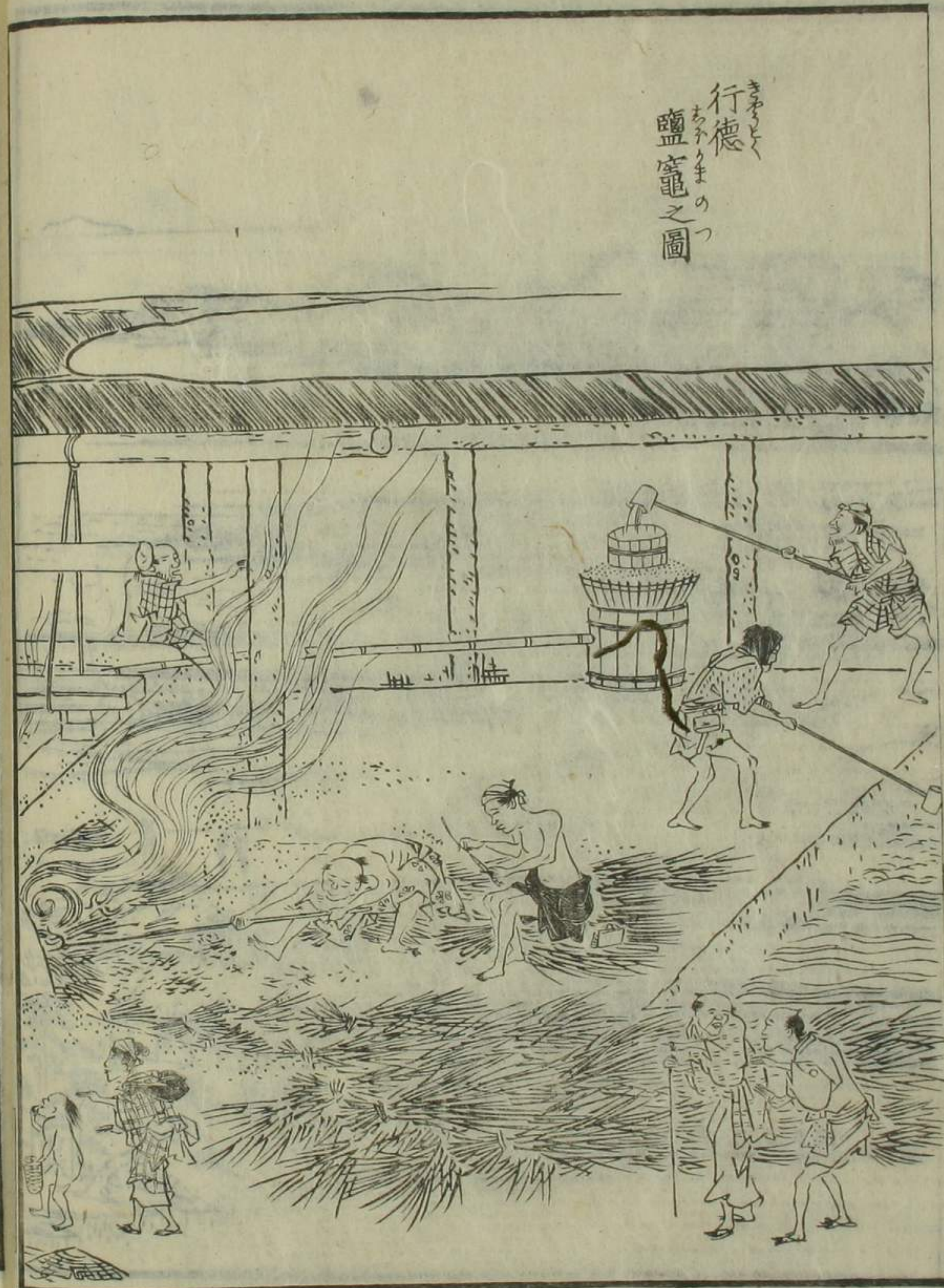
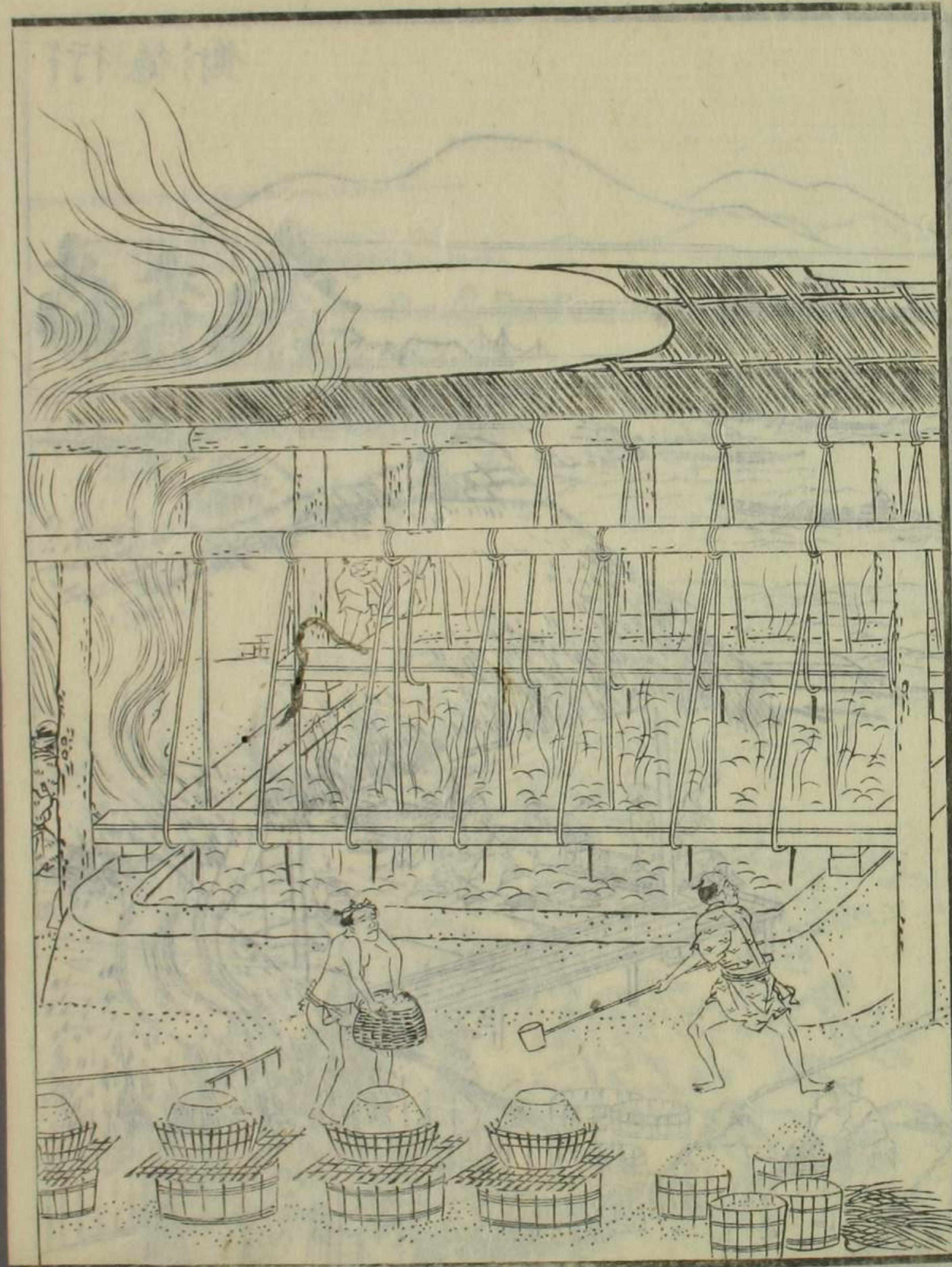


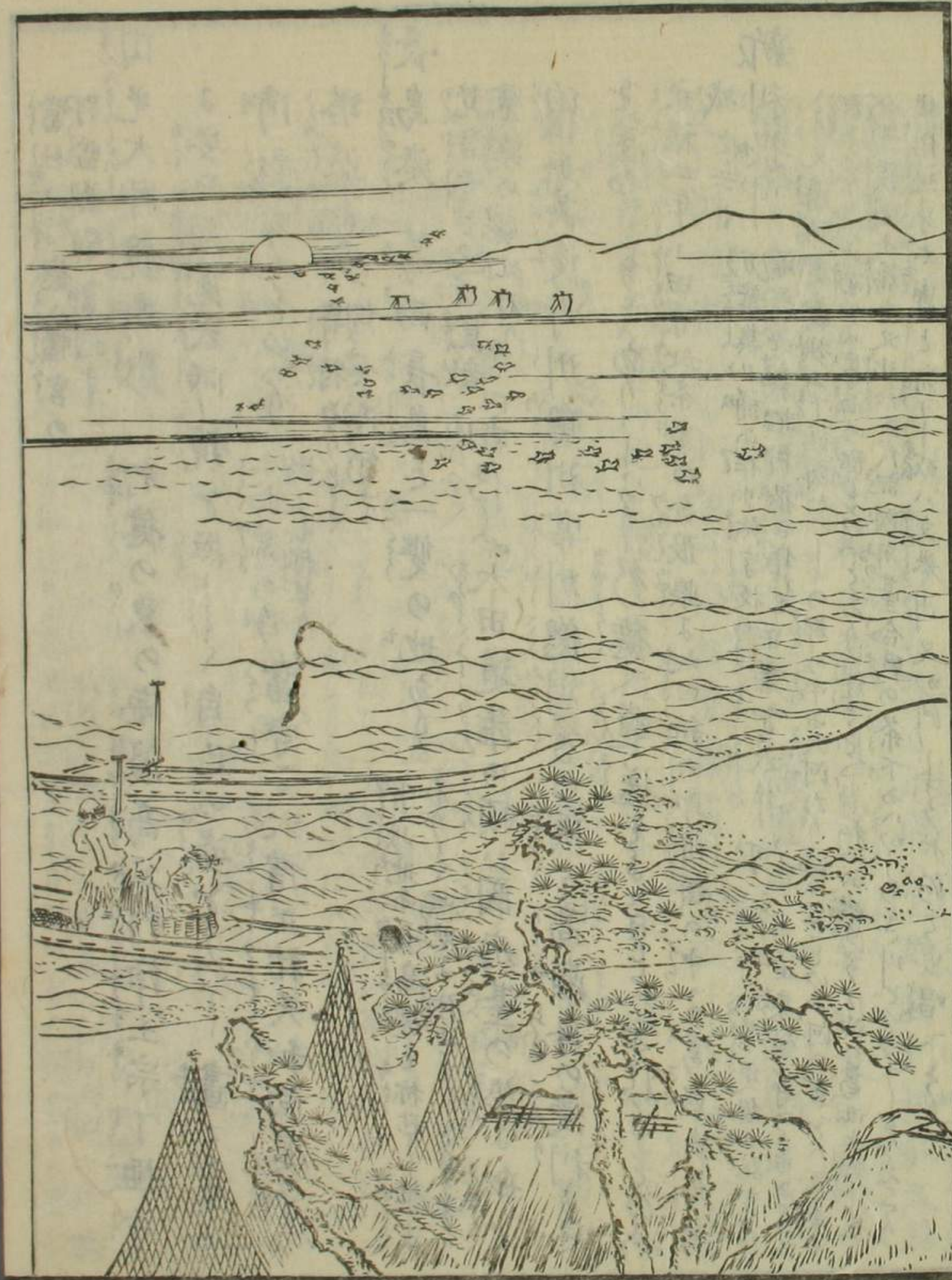
左側あり浄土宗ゆゑ鴻巣の勝願寺に属せ當寺往古
普光庵とて草庵なり慶長十五年庚戌閑山聰蓮社
回誓不残上人寺院を開創し阿彌陀如来の像を本尊と
す三丈佛工運慶の作なり往古鎌倉二位の禅尼政子の命よ
り是を造る遙の後天正十一年より一品大夫人崇源院殿
鎌倉より移しあひ持念あり後大超上人に賜り又
當寺弟二世正蓮社行誓忠残和尚當寺に安置なり
十七世晴誓上人殊は道光普く境内閻王の像ハ運慶の彫造
あり座像ゆゑ八尺あり毎年正月十六日當寺十月十夜法
會あり最賑り山門額海巖山の三大字ハ縁山前大僧正
雲卧上人の真蹟なり
鹽濱 同所海濱十八箇村に涉り云風光出趣あり主人去
此鹽濱の権輿ハ最久しく其始を去りたり然も天正

十八年 關東

御入國の後南徳東金へ御遊獵の頃此鹽濱を過りかたせ
られ船橋御殿へ塩焼の賤の男を召し製作の具を具し
召れ御感悦のあまり御金若干を賜り猶未永く鹽竈の煙
絶せ嘗て天正下の寶とせし旨 釣命ありしより以来
寛永の頃迄ハ
大樹 東金御遊獵の御ハ御金杯賜りて後風浪の災ありし
頃も修理を加へり
御入國の後日あり此徳の鹽濱へ船路と
此地の鹽鐵ハ其製他ハ越堅強なり保り久しと東八州
悉く是を用ひて食料の用とせ
甲宮 行徳入口の繩よりあり其由来今知へり土人或傳へり
云國府臺合戦の時某の大将の兜を祀りてとありん歟







徳行衛



當社ハ行徳八幡宮の別當兼帶持記す

日光大師鏡御影

行徳の東の海濱高谷村浄土宗了極寺
安也日光大師鏡を照し自己の姿をうつし畫をあり

御影なりとつり 土俗錦の御影と稱せし 當寺は
大僧正祐天和尚真淨の

塔婆あり 寄持あり 昔此地は長島殿と稱せし領主あり此地に住せし

長島湊 葛西長島と一雙の地あり ありく此地は住せし

梵音寺のつる觀音 相傳ふ太田道灌の頃ハ國府臺の湊は船と

伯す其後野州奥州常州德州等の國々高瀬舟の便利なき

を用ゆるよりありしより行徳へ運送もさるるありし

永祿二年小田原北条家の分限帳は太田新六郎所領の中は葛西長島高

新利根川 萬葉集に補の作り活字板 曰名を太井河と云ふ 東鑑等の書に云ふ

源平盛衰記に利根は作れ 郡の中は大河あり河の東は葛西の

又清浦興義抄云下総國の郡の西は葛西と稱し 西は葛西と稱し

今武蔵國小屬を又北条五代記國府臺合戦の条下は葛西と稱し

世俗坂東太郎と稱し城ハ文興川又カハ川と云ふ

行徳を流るる行徳川とも号く水源ハ上野國利根郡文殊

嶽の山谷より發し高料川吾妻川烏川碓井川及び信州の

國郡より出る所の諸流合し武州幡羅郡に至り一河となる

又上州渡瀬川も利根に落合栗橋より分流し一流ハ北総小

入開宿本丸等の地も傍る東流し鉾子より海に歸る是を

利根川と号く 又東太郎 一流ハ武蔵下總の間に南へ流れ國府

臺の下を流徳の方へ曲流し海水に歸せり 是を新利根

按侍中群要に散位をカ稱しあり 西宮抄は太夫をカ稱し

と云ふ公事根源云大節はカ稱しあり 又朝野群載に檢非違使廳下カ

カ稱しあり五位以上中はカ稱しあり 又朝野群載に檢非違使廳下カ

祿職にカ稱しあり 又朝野群載に檢非違使廳下カ

延喜祝詞式は倭國の六神能カ稱しあり 又朝野群載に檢非違使廳下カ

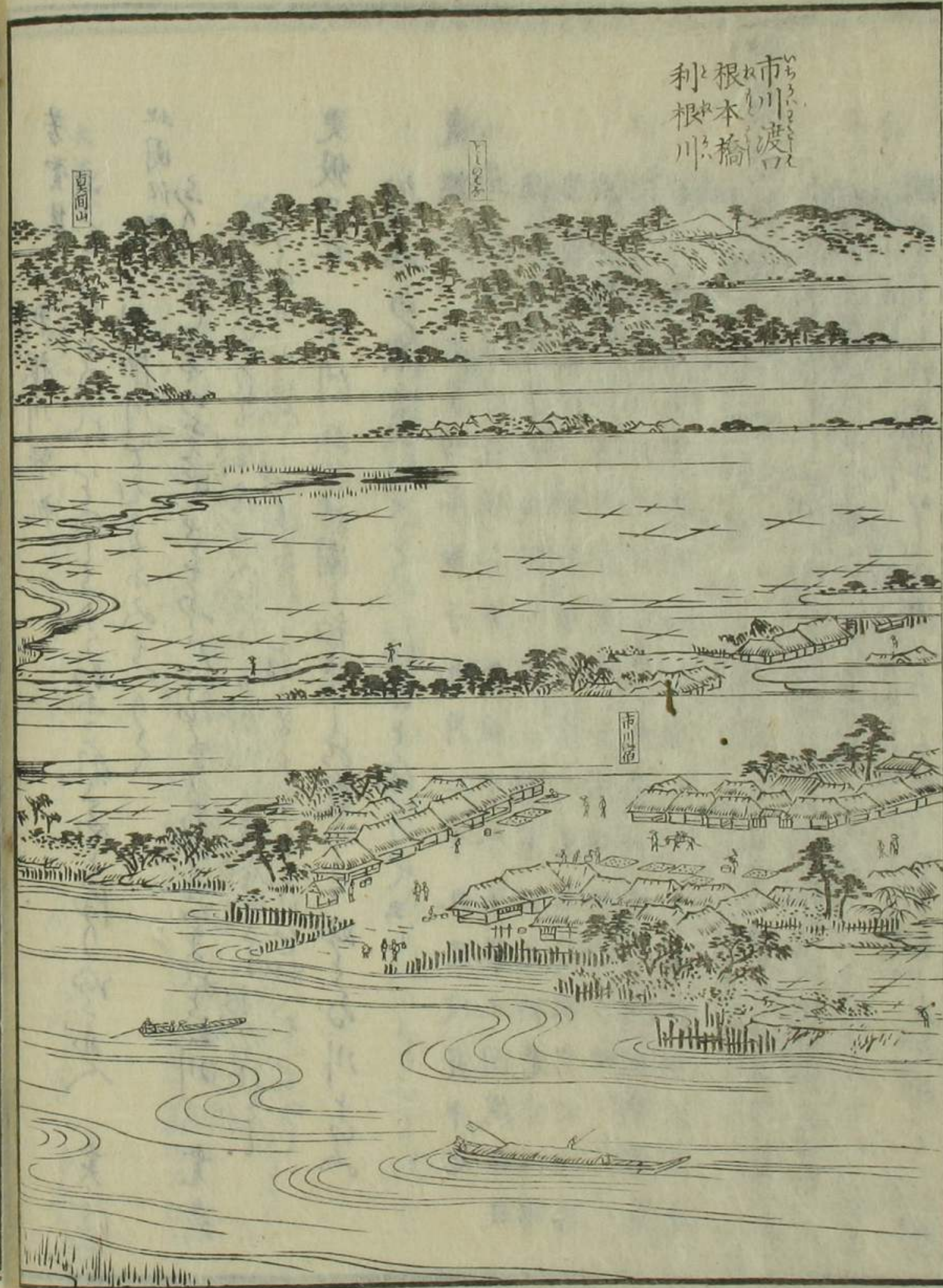
里長が令なるともカ稱しあり 又朝野群載に檢非違使廳下カ

神小毎歳正月初午日大頭と云ふカ稱しあり 又朝野群載に檢非違使廳下カ

ありて是を伝ふ各六位中 神の供奉職より 射あり又五節の式

ありて是を伝ふ各六位中 神の供奉職より 射あり又五節の式

ありて是を伝ふ各六位中 神の供奉職より 射あり又五節の式



野依ありてつとくわめると秘唱せしもあるへりす

市河城址 其地今あつりて 義経記云治承四年九月十日武藏と下

あつりてあり青ハ松戸を 鎌倉大草紙上杉憲忠あり 今度中務

入道了心の子息實胤自胤二人を取立下總國市川の城小指

菴康正二年正月南圖書篠田出羽守其外大勢指遣一數度

合戦して同十九日終小城を責落を篠田河内守ハ関宿より打る出

武州足立郡を過半押領し市川の城をとる云 猶前の第六卷石

根本橋 市河の渡口より總寧寺へ行間の小川ハ架を此地を根

本村とのあり号とを橋下を流るハ真間の入江の舊跡より

發せし水の水流なり

安國山總寧寺 市河の驛より北の方の丘利根川の流は傍てあり

曹洞派の禪林や々関東の僧録司三箇寺の一負なり 福田大寺武藏越生

龍徳寺當寺ハ是なり 本尊ハ釋迦如來開山ハ通幼和尚といふ當寺

往古ハ近江國あり天正三年乙亥北條氏政當國関宿此

地ハ移をされと屢洪水の患あり寛文中竟ハ此地ハ

とあり惣門の内右ハ鹽竈六社明神の社あり奥陸の摸なり

とハ大田道灌手植擯と稱するハ大門の通り列樹の中下馬の

石碑ハ相對して右の傍あり又客殿の脇ハ梅の老樹あり是ハ

道灌親裁す所と當寺より宗師道正

國府臺 總寧寺の辺より真間の辺迄の岡をまわかく稱する

あつり 北条五代記云古き文ハ國府臺小舟代嶋位とも 按ハ鴻基ハ武

州栗橋の西あり此地を云ふあり和名類聚抄ハ下総乃國

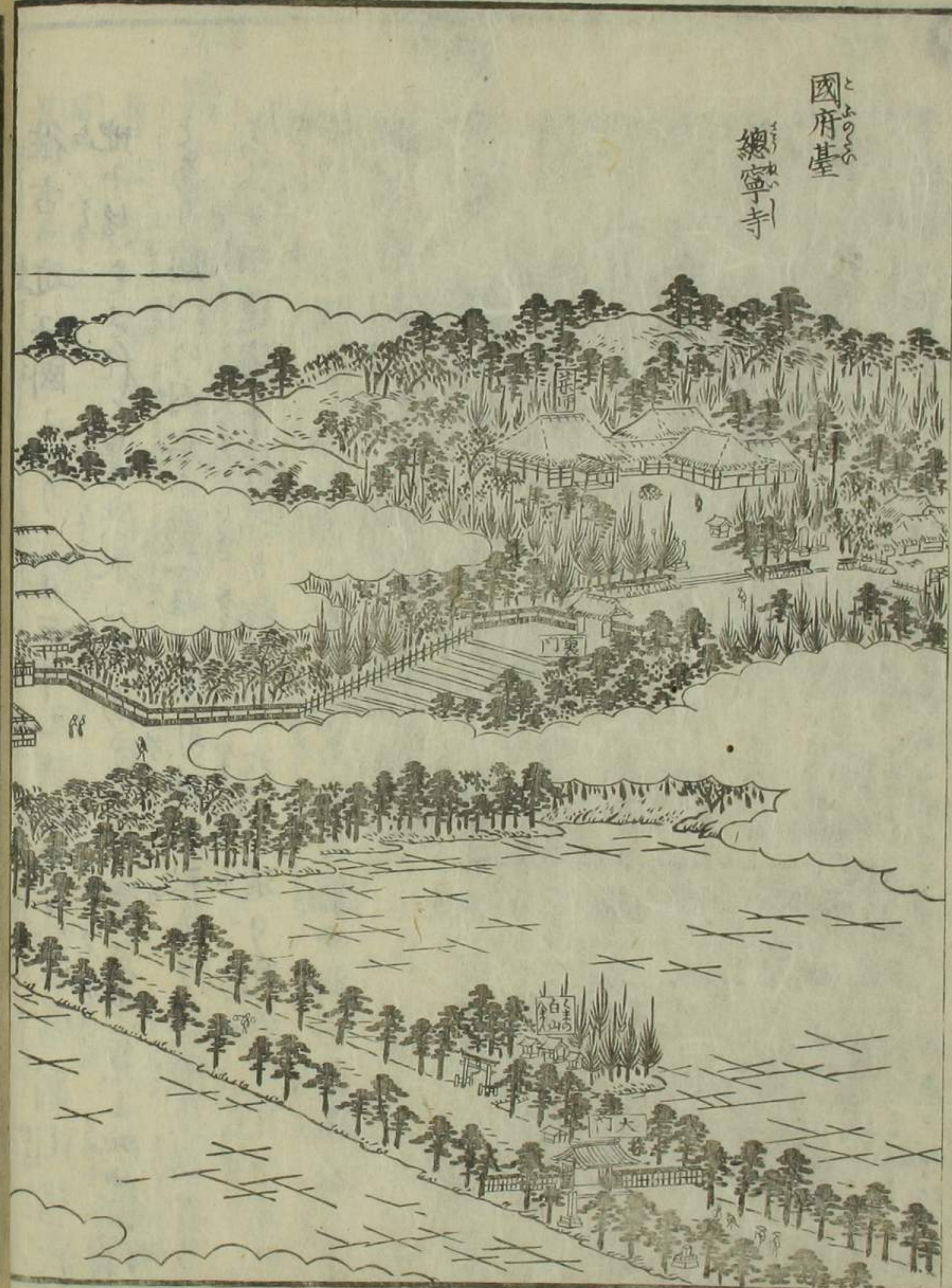
府ハ葛飾郡ありと記せり依考ある國府の近き辺ハあり

丘山ありハ國府臺といふ号たり 或人云下総國葛飾の府ハ

せしあり葛西昔ハ下総小属せり 永正六年の宗長ハ

の府のうちを半日 按ハ前ハ新井根川の条下ハ

葛飾郡ハ大郡ありハ利根川と國府を中央小定やく必東を葛東と呼び以西を



國府臺
總寧寺

其二
古戰場



國

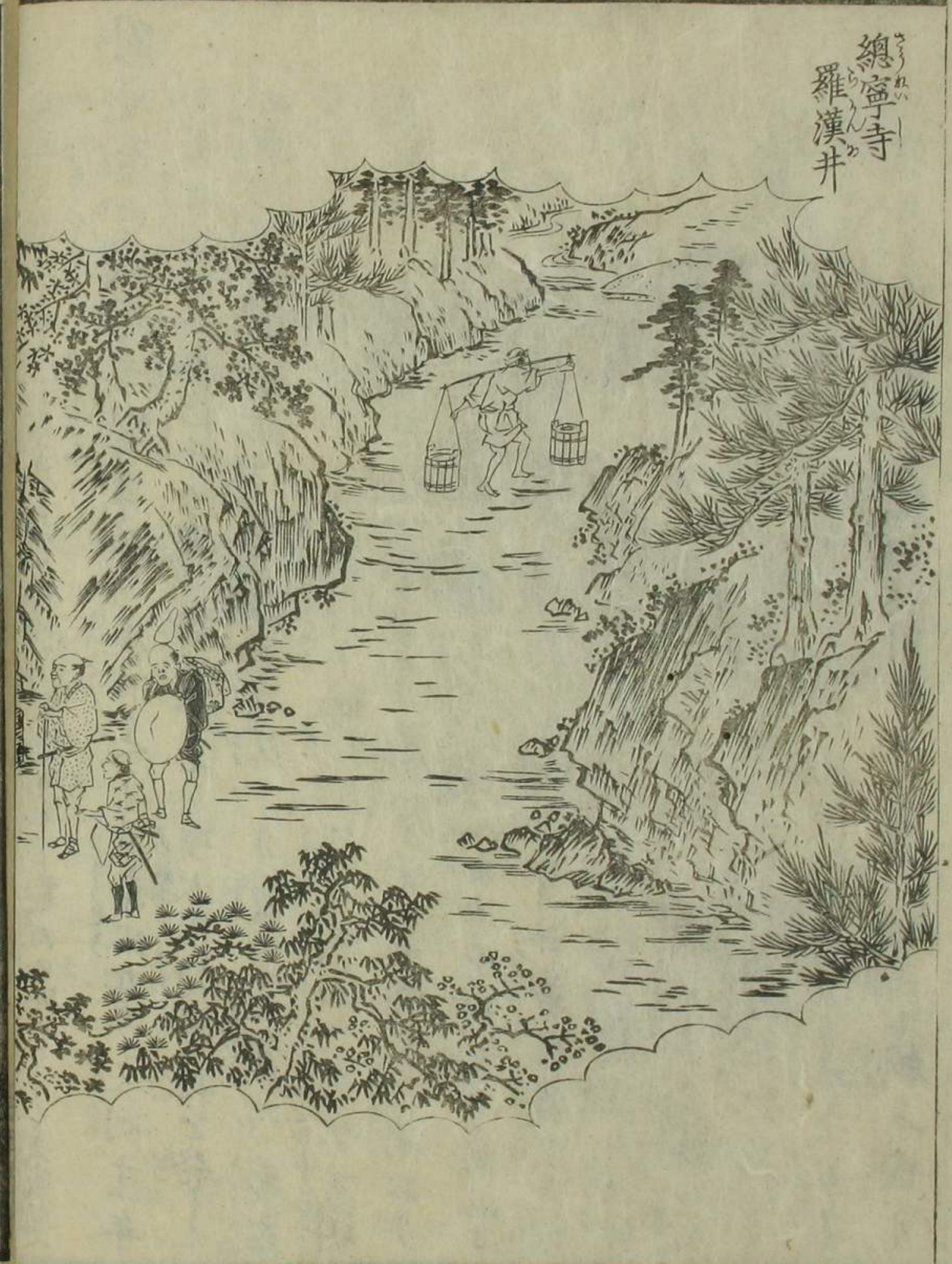
葛西と八景ありてこれと今利根川を際りと葛西の辺こらく武蔵國へ
 加へたまふゆと六なりあり
 府基古戰場 總寧寺の境内に之其舊跡なり文明十二年

七月北總の一揆臼井の城小指籠りたる頃太田持資兵を發して
 此地小陣城を取立件の一揆を攻落し程の究竟乃要害
 なりこれ天文六年中も或は小弓又作御所足利左兵衛佐義明
 兵を起し小田原を攻んとし事なると小泅て其陣あり

乃れ同年十月四日北条氏綱及び氏康小田原を進發し同五日
 鴻の臺の陣を責む戦ひ利あり義明父子并舎弟基頼共討
 死む又永祿七年の八日大田新六郎義兄弟の輩小田原小宿き同苗
 美濃守資正入道三樂弁及び里見安房守義弘等と此地小屯
 しこれ小田原より討手として遠山丹波守同隼人佐をむら
 む故小田兄弟相闘相違して武州岩附へ落行たり然も北条
 氏康父子小田原より馳向ひ同年正月七日八日大戦小依



總寧寺
羅漢井





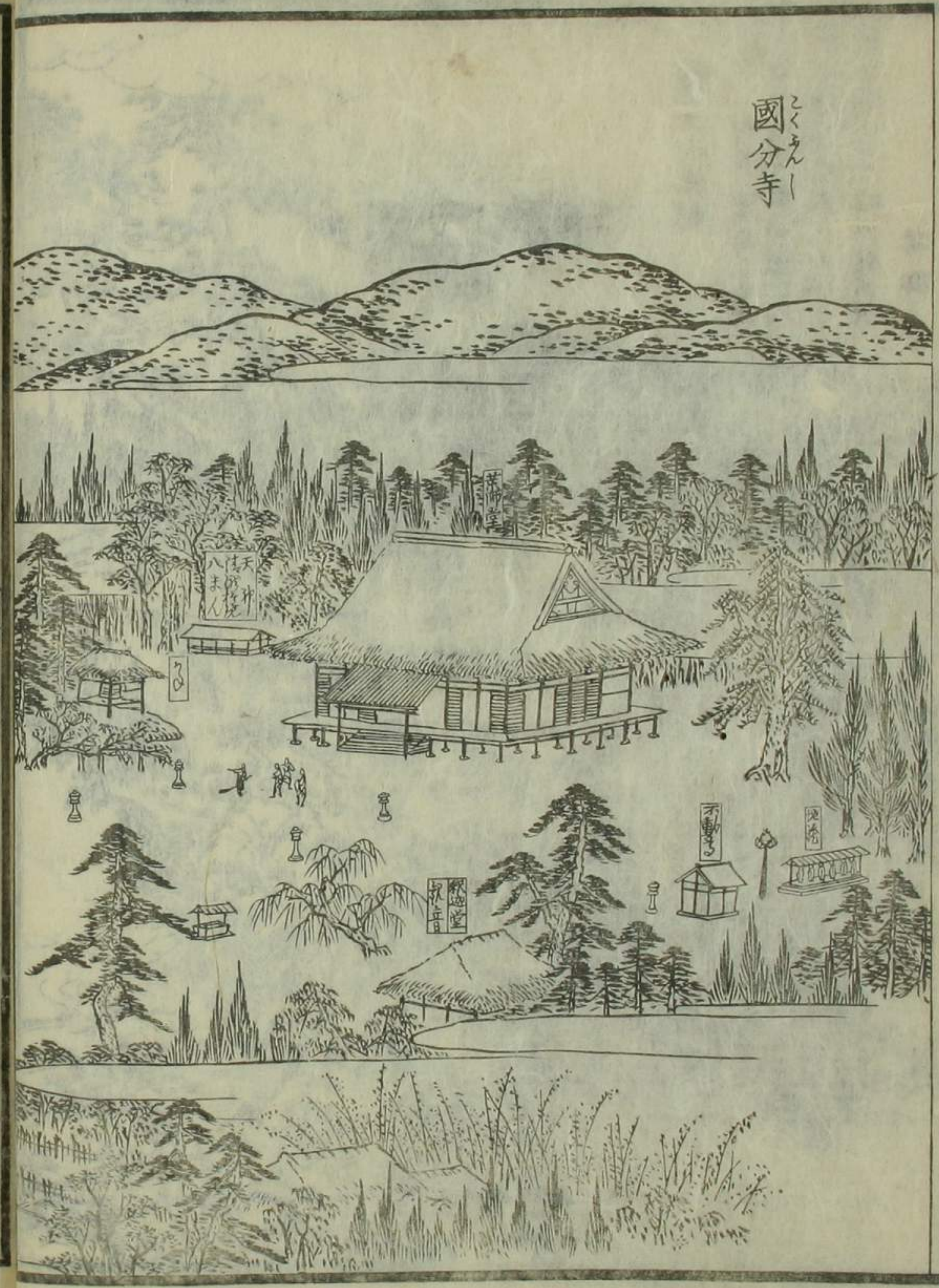
總寧寺晚眺
 荒城千仞沒 蕭寺上方開
 山嶺江帆出 踰迴郊樹來
 磬鐘餘鹿野 戰代古鴻臺
 落日斯時恨 臨風起客哀
 南郭



國府臺
 浙岸之圖



國分寺



義弘三樂の輩終小敗走也 山上諸書に載る

殿守臺旧址 同一境内にあり上小富士浅間の小祠あり

白檀多し

石櫃二座 同所あり寺僧傳云古墳二座の中北のものを里見越前守忠弘

或云里見義弘の舎兼正木内膳の石櫃なり中古土崩れりといふ一ツハ其主詳あらず

あつらふ其項櫃中より甲冑太刀の類あり金銀の鈴陣太鼓其餘土偶人等を得たりと

發其二を移して徳寧寺に収蔵せり

鐘淵 同所断岸の下利根川の水を号く傳云里見氏乃陣

鐘此淵小沈没之故小号とすと 其鐘冷此地の水底に存せり或人云

鐘の水中小落へりゆゑなりと此鐘ハ船橋慈雲寺の鐘ありと云ふ此地へ持来たり

國府城址 同所徳寧寺より東の方を以て往古國府五郎某ある人の

居城なりし慶長ゆゑに没収せしむあり

按小國府五郎ハ千葉介常胤の弟國府五郎胤道と云ふ一説あり

喬の人此地に住し慶長の項逆居られり一説ハ同卷牛深前宮の奈下ゆを

國分山金光明寺 同所東の方國分寺村あり今ハ新義の真言宗

中々京師三宝院小属を本尊藥師如来の像ハ関山行基大士の

作脇士の十二神將ハ運慶の彫像なり 堂内鬘頭盧尊者ハ

行基大士の作ありと云ふ 當寺と

聖武天皇の御願ゆゑ毎國小置す所の國分寺の一なり中興関

山と省天法印と号し本堂の額小金光明寺の四字を畫せしハ智

積院僧正運叔の筆なり

樓門 樓上小古佛釈尊と安置を関創 釋迦堂 本堂の右にあり

天王の像ハ上古の物やゝ甚奇古なり其餘古佛像多し續日本紀云聖武

天皇普く天下とて釋迦牟尼佛の金像高一丈六尺者各一鋪を造り并大般

若海各一部寫さむ云

小田原北條家制札一通 興小子正月十四日遠山左衛門

全同領國分郷と宛名を記し

古證文二通 二通とも天正十三年乙酉二月三日とあり

とあり其文中ハ十二坊のあり進き頭も其十二坊存せしとあり

古笈一 権大僧都觀學院慶長六年と彫あり

延喜式主稅式日 下總國公廨各四十万束國分寺

料五万束藥師寺料三万五千束文殊會料二千束

藥分料一万束下畧

鏡石

真間の弘法寺より
國分寺へ移方の
田畔石橋の傍小
溝の中あり夫云
此石根地中入り
其際をあらす
依要石とも号く
るあり



當寺往古ハ伽藍魏々ありしと云ふ此の星霜を經く大小衰
廢今ハ昔の万々一を存するもの當時の礎石と稱するもの堂前小
あり今の寺境ハ大田道灌の頃の陣屋の旧跡ゆく古の寺境ハ乾の
方ありしと云ふ今ハ畑とあり

内膳山 國分寺より東の方一丁計を隔てる丘を以て往古里見

義弘の舎弟正木内膳の陣營の地と云ふ

鏡石 弘法寺より國分寺へ行方の田畔石橋の際の水中にあり

此石根地中入り其際をあらす故に小要石とも号くると云ふ
土人此石橋ハ國府基にあつた石棺の蓋なる由云傳ふ

持國坂 國分寺より真間へ行方の坂を以て古ハ此地ハ國分寺の

四天王の内持國天の堂舎あり故に号くと云ふ

真間山弘法寺 國分寺の南にあり市河村日蓮大士弘法の地ハ

して六門家と稱する所の其一員なり日頂上人を以て開祖と云ふ

真弘法寺

我身ハ
の
まの
格
蓮
日



入重
玄門
倒修
九事
の意
を
ろ
く
と
せ
行ふ





本國院日蓮上人ハ六老僧の中にて伊豫阿闍梨と稱せ富本常忍の子なり文永四年
 丁卯日蓮上人ハ就く得度也弘安五年壬午上足の第五とあり日蓮上人の滅後守塔居士
 と管胤して本國院と号す上人ハ山本坊と稱せ正安元年己亥父常忍寂その後良とつ
 ぐく八月十二日とせ去り終つて依示寂の年月其終焉の地をあるす
 といはれ寺院をのりしを本堂とて釋尊の像と安を富本常忍嘗
 造り當寺ハ奉安を時蓮上人時頂師とて祖師堂ハ其右小並ハ内ハ宗祖上人の
 一と點眼せし賀の表を賜ふ
 像と置此像ハ日法上人の作なり支院十餘宇各證道此下に
 列せ大門ハ松の列樹中へ六丁程あり
 楓樹 秋迎堂の前あり今ハ枯株とせ其形を存するのむくハハワケり四五丈ハ
 遍覽亭 右文の備のありあり額ハ遍覽亭と題せ黄檗千呆和尚の筆跡
 實ハ大城甲相の群山雲の霞の横とて又このハ房總の海水遠く開け
 實ハ我里の風光を賸へり
 樓門 石燈の上ハ簷ハ左右の金剛カキ工運慶の作なりといひ全餘黒色ハ
 當寺往古ハ真言瑜伽の古刹なりといひ日蓮大士此地ハ遊化の頃
 寺僧大ハ宗意を論し竟ハ大士の化導ニ帰依し宗風を改
 轉せりとて
 或人云西新井邑總持寺ハ安とて弘法大師の靈像ハ
 當寺改宗の頃かこまてまねとて弘法大師の靈像ハ

真間の弘法寺に住せり或日日常と問答を屈と請ふ逃れり時常衆徒を化す寺因に杖の道場と云く又先徳記を考ふ閑東河田谷天谷宗の中より性と云あり本文小宗祖上人と問答せし住侶の名を住せり

當寺 什宝多き中を宗祖上人及び諸徒の真筆の曼荼羅消息の類ひ教通あり悉く奉ふ不違每歲九月

九日より十八日迄法華經十部讀誦十月十三日ハ宗祖上人の忌日たり御影供と修行せり近在の道俗群衆を

真間浦 同弘法寺の前の水田の地を以勝鹿の浦といふ此所のつと云ふ

此のあり所謂大洲ハ初と洲あり所謂立野ハ水田を問發せし陸地とあり一とあり

万葉集 可豆思加之麻萬能守良未乎許具布禰能布奈

妣等佐和久奈美多都良思母 夫木抄 俊頼

續後撰集 真間濱 地なりあり

真間入江 是も同一辺なり今ハ耕田とあり又ハ民家林藪ふ沿革して古よ違へり

万葉集 勝牡鹿乃真々乃入江爾打靡玉藻荊兼手兒名

志所念 續十載 夫木抄

日 かりそめれまの入江のむかへをことごとく行へるあり

真間於須比 仙覺律師の萬葉集抄云於須比の山をひふとの

於思微爾とありむかへり磯辺ありの本居宣長翁の考へり手古祭後

ありしう浪さゆきさきとの意ありとあり磯辺とのあきさるれり

可豆思賀能麻萬能手兒奈家安里之可婆麻未
乃於須比爾奈美毛登杼呂爾

真間繼橋

弘法寺の大門石階の南下の方の小川小架を所乃

あつ川の橋の中あつ小橋をさしてなり
或人曰古ハ兩岸あり故に継橋と云ふ
中梁ゆく打ちけり故に継橋と云ふ

安能於登世受由可牟古馬母我可都思加乃麻
未乃都藝波志夜麻受可欲波牟

猶麻也昔のまは終務をいれすまうはまう那
育る不越り波はか川にやう川にうらまの間の終務
朝村

あつ川にまの波も吹あがり夕波越るよとれつきを
按朝村の和奇ふよとのつきをよとあつ水の渡ふけりといふ意あり
山城の邊にあり

入重玄門倒修凡事の意を

らふ人を渡しとせし種ふあふまとのまは終務
日蓮

真間手兒名舊蹟

同所継橋より東の方百歩をうらふあり手兒

名墓の跡なりとの後世祠を営むこれを奉り手兒名明神
と号し婦人安産を待り小兒痘瘡を患ふ類ひ立願して其

奇特を得とて祭日ハ九月九日あり

此云文龜元年辛酉九月九日此
神弘法寺の中興第七世日與上人の

靈告ありあつてこの崇め奉るとして春墓文集継橋記ハ手兒名のつを載りといふ
其説里諺ハあつてこの崇め奉るとして春墓文集継橋記ハ手兒名のつを載りといふ

清輔與儀抄云是ハ昔下総國勝鹿真間野の井ハ水汲下女

なりあつて麻衣を着ててこゝへ水汲其容貌妙なり

貴女ハ千倍せり望月の如く花の咲く如く立ちて見人々

相競ふ夏虫の火火入り如く湊入の船の如くなりて小女思ひ

あつ川に一生のこゝろを存し其身を湊入に投中畧

又か川に此ゆのてこかともよめり真間乃入江真間此

継橋真間の浦真間井真間の野なともあるこれ此あり

云々

過勝鹿真間娘子墓時作歌
山部宿禰赤人
古昔有家武人之倭文幡乃帶解替而廬屋立妻
問為家武勝壯鹿乃真間之手兒名之奧擲乎此
間登波聞杼真木葉哉茂有良武松之根也遠久
寸言耳毛名耳毛吾者不所忘

反歌

吾毛見都人爾毛將告勝壯鹿之間間能手兒名
之奧津城處

詠勝鹿真間娘子歌

高橋連蟲麻呂

鷄鳴吾妻乃國爾古昔爾有家留事登至今不絕
言來勝壯鹿乃真間乃手兒奈我麻衣爾青衿着
直佐麻乎裳者織服而髮谷母搔者不梳履乎谷
不看雖行錦綾之中丹暴有齋兒毛妹爾將及哉

望月之滿有面輪二如花咲而立有者夏蟲乃入
火之如水門入爾船已具如歸香具禮人乃言時
幾時毛不生物乎何為跡歟身乎田名知而浪音
乃驟湊之奧津城爾妹之卧勢流遠代爾有家類
事乎昨日霜將見我其登毛所念可聞

反歌

勝壯鹿之真間之井見者立平之水挹家牟手兒
名之所思

下總國相聞往來歌

作者未詳

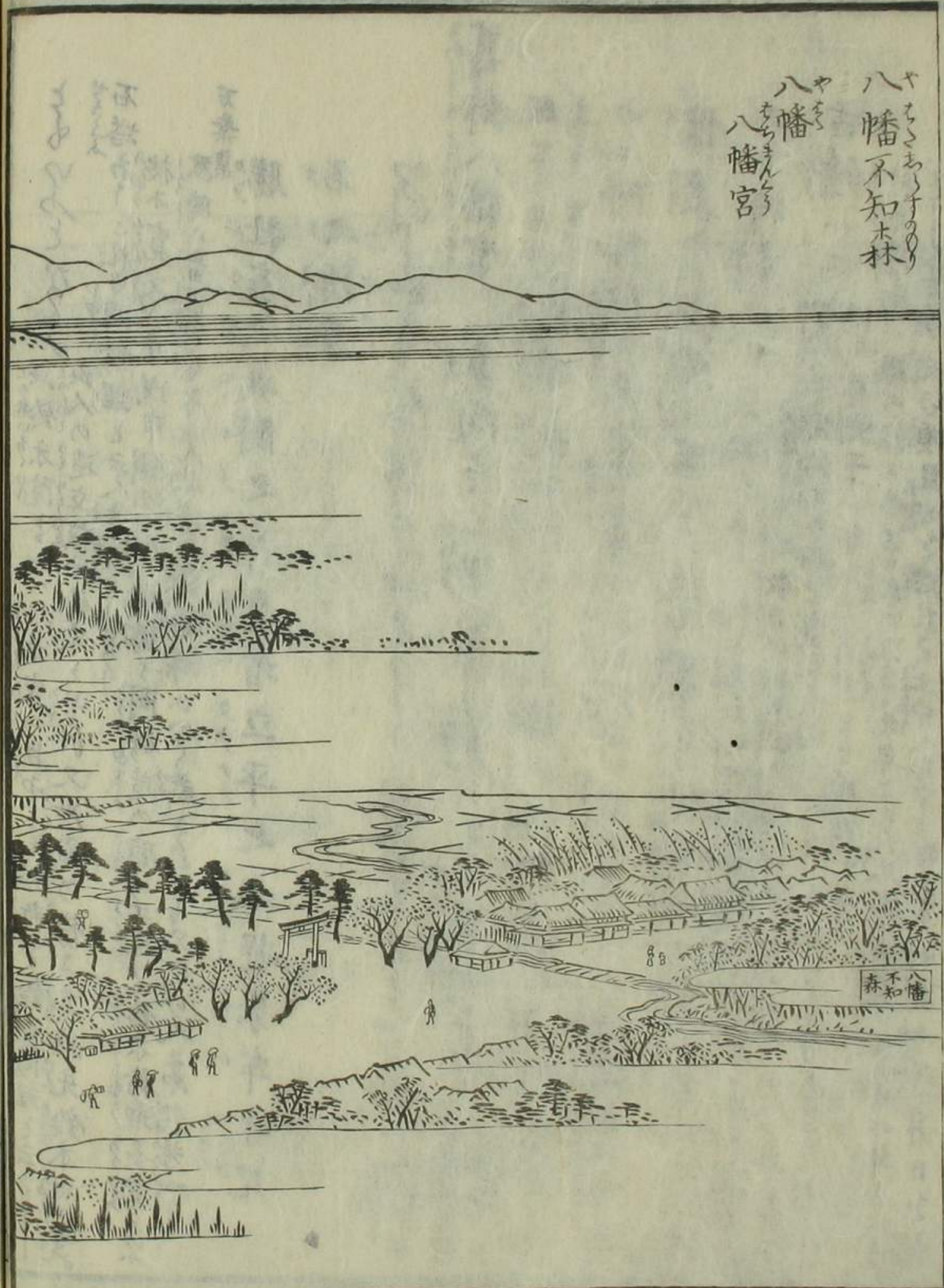
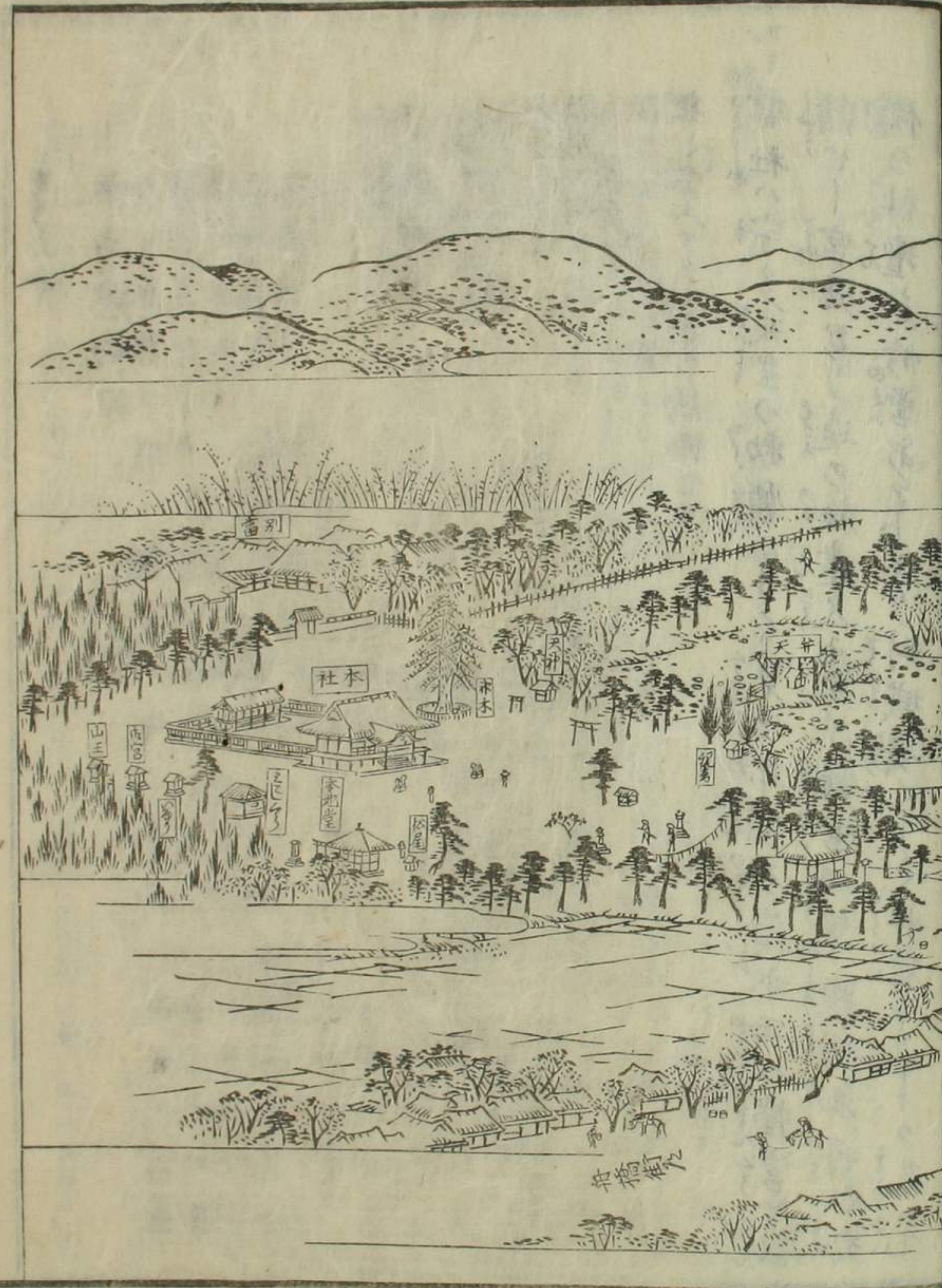
可都思可能麻未能手兒奈乎麻許登可聞和禮
爾余須等布麻未乃氏胡奈乎
真間井 同所北の山際鈴木院との草庵の傍ふあり手兒奈
汲る井ありと云傳の中古此井より靈龜出現せし故に亀井

梨園
真向より八幡へ
仍道の間
あり二月乃
花盛の雪と
欺は似たり
李太白の詩
小梨花白雪
香と賦し
結あり



ともいふをかり
此の鈴木院と云ふ北条家の臣中俗稱を鈴木修理と云ふ
石塔ありこれ同修理と云入造立小鈴木と号し又此庵の傍は其祖先鈴木近江守
按小寛文八年戊申相州鎌倉鶴岡修造の時の工面と鈴木修理長常と云
然時ハ番面の家なる人牧鶴岡梁殿ふかく裁されとも又別の人名を推考すべし
万葉集
勝牡鹿之真間之井見者立平之水挹家牟手兒
名之所思

葛飾八幡宮 真間より一里あり東の方八幡村あり 常陸并房総の海道中
釋かり鳥居ハ 別當八天台宗あり八幡山法漸寺と号し本地堂
あり阿弥陀如来を安置し二王門あり表の左右ハ金剛密迹乃
像裏あり多聞大黒の二天を置し神前右の脇ハ銀杏の大樹
あり神木とす 此樹のうづらの中ハ常小蛇あり毎年八月十五日祭礼の時音楽
古鐘一口 寛政年間枯木の根を常と号し其文三尺七寸あり龍頭の
披小應永の鐘の銘あり元亨元年より凡九十有餘年後の年号あり
披小應永の鐘の項世を恐れと土中へかき埋めし其年号月日を刻



八幡不知森
 八幡宮

傍に石碑を建つ河の涸れなきを知らせ

高石明神社 八幡より東の方佐倉街道鬼越村深町の入口道より

左の岡あり別當八日蓮宗あり泰福寺と号し祭礼ハ九月

九日なり土人傳云當社ハ里見安房守義弘の弟南總大多木

城主正木内膳亮時徳の墳墓ありと云り

神體ハ劍を帯せ馬上軍神の像なりとの

注進の状ハ幡庄内かく高石神村の地を寄附せり又同年二月同前貞祐

上人へ附せり證文中下從國八幡庄高石神南方中島内坪村のりあり傍に

考れハ高石神村の名古きなりと云り

安房須明神社 同所中山の北池田とのり北の岡あり傳云

里見越前守忠弘の息男里見長九郎弘次の墓なりとのり

今淡島明神と云

北条五代記ハ里見長九郎弘次生年十五歳初陣なり

かけ刃を持きた二騎もろろ落ゆと相模國の住人松田左京亮康吉遊々け組く

落より既小首を取むとせしと容美麗中へ花のむき少年なりと云り

落しと思ひしと味方軍霞の死走來り首せり

落しと云り味方軍吉も涙みられ前後迷ふかき目ありと云り

引前小傳云故なりと云

寫節志云中昔かゝりの浦小盛賣とのあり

壯子時なり今幸國を復す

來りしとて盛賣とのことあり復更中て房州小至り

此時既ハ七月孟孟會中て家内は鬼棚を敷壯子盛賣の

下居らし脚前ハ供まの極皆こり此をのこふ

然ある日家の内ありしもの盛賣を豆まきあり

中ハ彌地とぬぬ母地ろろき悲むる

あれハ不測の思ひと云

とて安房頭明神と稱し

つり律と稱し音の通ハ故ハ今ハ安房須明神と稱し

日蓮大士最初轉法輪の道場あり一本寺なり

正中山本妙法華經寺 船橋街道の左側あり

日蓮大士最初轉法輪の道場あり一本寺なり

中興八日祐尊師

鎌倉大草紙云十葉介貞胤父の宗胤三井寺にて討死
後此國落道ハ宮方老新田義貞の法供より一と
法花の学匠あり下総國中山の法花律師の中興八日上人を
堂建立あり五重の塔婆を建てし後貞止谷の吉野へ移り西征將軍の宮の
市下向の時法供して九州へ下り大隈守に補任し肥前國を以て
九州下向の肥前國松玉山と建立して徳州の中山を以て未代迄此所を中山と西
一寺と号せしあり

祖師堂 日蓮上人の像を安せ 日法師の額 祖師堂 太虚庵光悦筆

祈禱堂 同所後の額 祈禱堂 筆者不知 法華堂 洞左ふりふ七手刻の

置此祈禱堂大田東明の宅地なり東明日常上人の教を受自の宅地を轉して佛宇とし
正中山本妙寺と号せし此堂ハ其頃堂建するの傍より世俗云飛驒匠作す

輪法華説法の道場なり 額 光明法花經寺 光悦筆 堂内外障の家帯

宗祖大士より常忍へ贈りし消息の写しを板に書く掲ぐ其文云く
沙四寶をもちて一回浮提才一の法華堂造りて靈山淨土にまゐりん

時ハ申あけさせしなり 十月廿二日 日蓮判

進上 富博入道

真書ハ宝庫に収む世に後四葉とて遺つと云はれし其の是なり
鬼子母神堂 同左小並此鬼子母神堂ハ鎌倉の某の堂ありしと移りしと
轉し左小並此鬼子母神の像ハ宗祖大士の作中より往古大士常忍建立し

法華堂に在せし頃一四菩薩の像と共に彫刻ありしと 經藏 祖師堂の前

竜淵橋 堂前の流に常昌堂 唱題念ふ常は 泣銀杏樹 常智堂の

真間私法詩の開山日頂上人ハ日常上人の子なり父の勳氣を繼ぎ思願を

いひ傳へ五層塔 同左あり釋迦多宝あり此當寺十八世 三十番 神社同

於小土よりあり當山の護法神とて 寶庫 方丈書院の奥の方あり 宗祖大士の

每奉土月八日火焚祭を修す 支院三十六字 今被廢せしものあり 二王門 額 正中山日等上人筆

或ハ光悦の筆なりと 中興岡山日祐上人墓 徳門より内左の方小路を入り二丁を過ぎ西の方山の中

奥の院 方丈の構の外右の方の小路を入り三丁を過ぎ東北の方あり 文應元年

号け大士として居らむ因り百日の前法あり 宗門最初擧法論の道場

蓮法花經寺の跡なり 日蓮上人像ハ屋敷の後ろにあり 聖人の像を安置ありしとあり 當寺第

其中は往古大士手刻の四菩薩の靈像ハ此地に安置ありしとあり 室藏に

安置し 日法上人の作の宗祖大士の影像を左の方あり 石塔の上ハ草堂とてあり

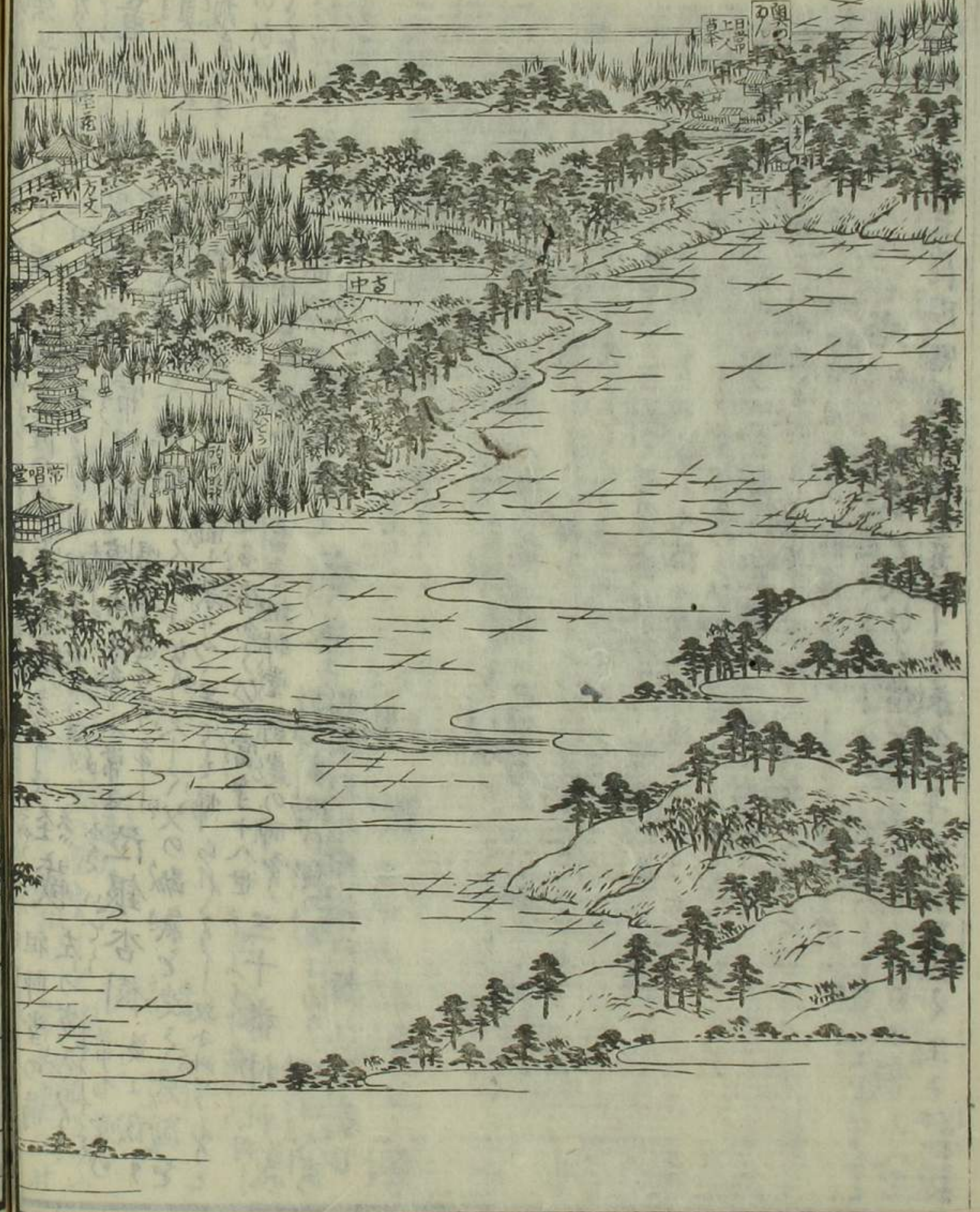
開山日常上人石塔 像ハ庭室を設けく僧を安置し 日蓮上人を

常忍修院と号し 因幡國富城の産中より兼久二年庚辰を以て生る 本化信

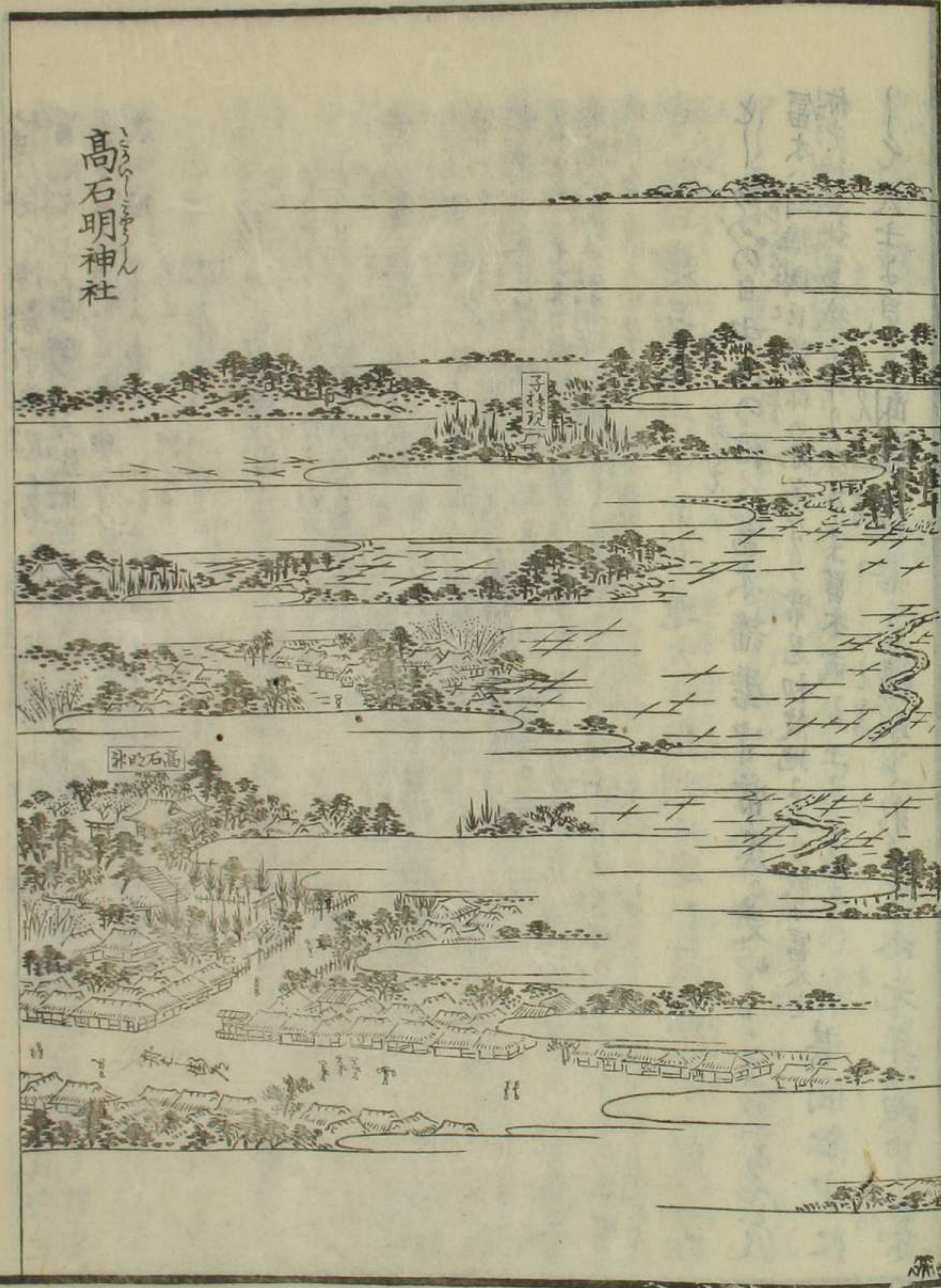
東土産
杉の
系
や
あじ
乃
松
月
宗長



妙法華經寺



高石明神社



其二



入道と長て播磨守常忍と名く後下徳國中山邑に後住し鎌倉に仕ふ土民稱之
富本初より日蓮大士の法化をたやみ大士の滅後竟小難澁して日常と改む
正安元年三月二十日八十歳ありて化すと云ふ
東土産 まの徳をのりて中山の法統堂本師寺に一宿し
あつた日一州ありとありしと説かざるを云ふ

杉のそまやあ〜〜ははのねのねの月 字長

寺寶立正安國論 諸山小蔵を承て四部なり洛の平國寺甲の身延山
大士の親 同来由 文永五年戊辰法鑑日頂のみあり
常忍台後了性と法義を論じて性竟不屈伏を富本氏
書を奉て是を告同十月朔日の返書中二十二通あり 高祖日蓮大士眞骨
宝塔不収む日忍師の添状あり其餘宗祖大士を承て諸師の曼荼羅及び其項の
武將ありひふ千家家の消息寄附状の類靈佛鬼神の像をも多々悉く記す違あり
寺記曰建長六年甲寅日蓮大士総州小遊ひ後鎌倉に帰らむ

と〜あ〜の目中山の住人富本播磨守常忍も又か〜こふ至らんと
富本は因幡國巨農郡の地名なり常忍初彼地より改め富本と
稱む和名抄罵城は作り今こふ富本或は土木とす 其間船中に
〜く大士よ見え聞法隨喜〜擅越とれる文永元年庚申竟小

宅地を轉〜一字を營〜大士を〜こふ居ら〜此時一百日

の間大小説法あり又大士自親一尊四菩薩の像を彫刻ありて

か〜こふ安置〜法華堂と號けらる 中山記云く宝庫一室四菩薩の末
菩薩形あり皆大士の手刻と云く此法華堂といふ 像二刻十軀あり其一ハ佛形其一ハ
大士最初轉法輪の道場なり今奥の院と稱す 時小曾谷教信 教信姓を
左衛門と稱す法名ハ法蓮日禮と唱ふ當國曾谷小住を 秋本太郎兵衛 茂氏より
後宅地をあら〜〜梵刹と〜曾谷山法蓮寺と号く 及ひ太田兼明等来〜擅越中
白井の人なり子孫小至り其地ハ一字を 及ひ太田兼明等来〜擅越中
創起〜白井山秋本寺と号く 及ひ太田兼明等来〜擅越中
な〜 兼明ハ五弟兼魚尉と稱す當國中山氏部必補康連の子なり曾富本氏の
論導を承て大士の宗化小師〜一子を授〜出家せ〜日高上人是こ
後中老僧日高尊師父兼明卒むその後日蓮大士の命を應〜
日常上人の教を受其家を改〜精舎と〜正中山本妙寺と號む

今の正中山 亦先の法華堂を合て一寺と〜正中山本妙法華徑寺
の地是なり 与号す則日常上人を岡山と稱〜日高師を第二世とす然小佛
心院日現師 當山 十二世 台命小より〜寺法を更〜より己降
京撰より輪番〜當山の貫主と〜れを毎年三月十三日より同

心院日現師 當山 十二世 台命小より〜寺法を更〜より己降
京撰より輪番〜當山の貫主と〜れを毎年三月十三日より同

十九日よ至るの間法華経千部讀誦七月十五日相撲奥仍も十月
十三日八日蓮大士の忌辰なるゆかり大法會を設く近國の道俗群衆
一と大に賑へり

善宮八幡宮 奥の院の地より一丁をかり東の方叢林の中より富木

氏の鎮守の神なりとの事 中山什物の内正和三年甲寅四月二十一日高師より計
葉介貞胤へ贈られし文云く所々堂宮田
地等之等中畧若宮御堂中山坊若宮別當職ありは彼岸田谷中下畧云く又同什
物正安三年日高師を添られし若宮持佛堂の本と稱す首題の數幅あり
然れ其頃ハ別當職を別小附置き崇敬尤厚なりとあり

妙正池 中山より北の方二十町を隔て千束村とのふあり 千束
邑は

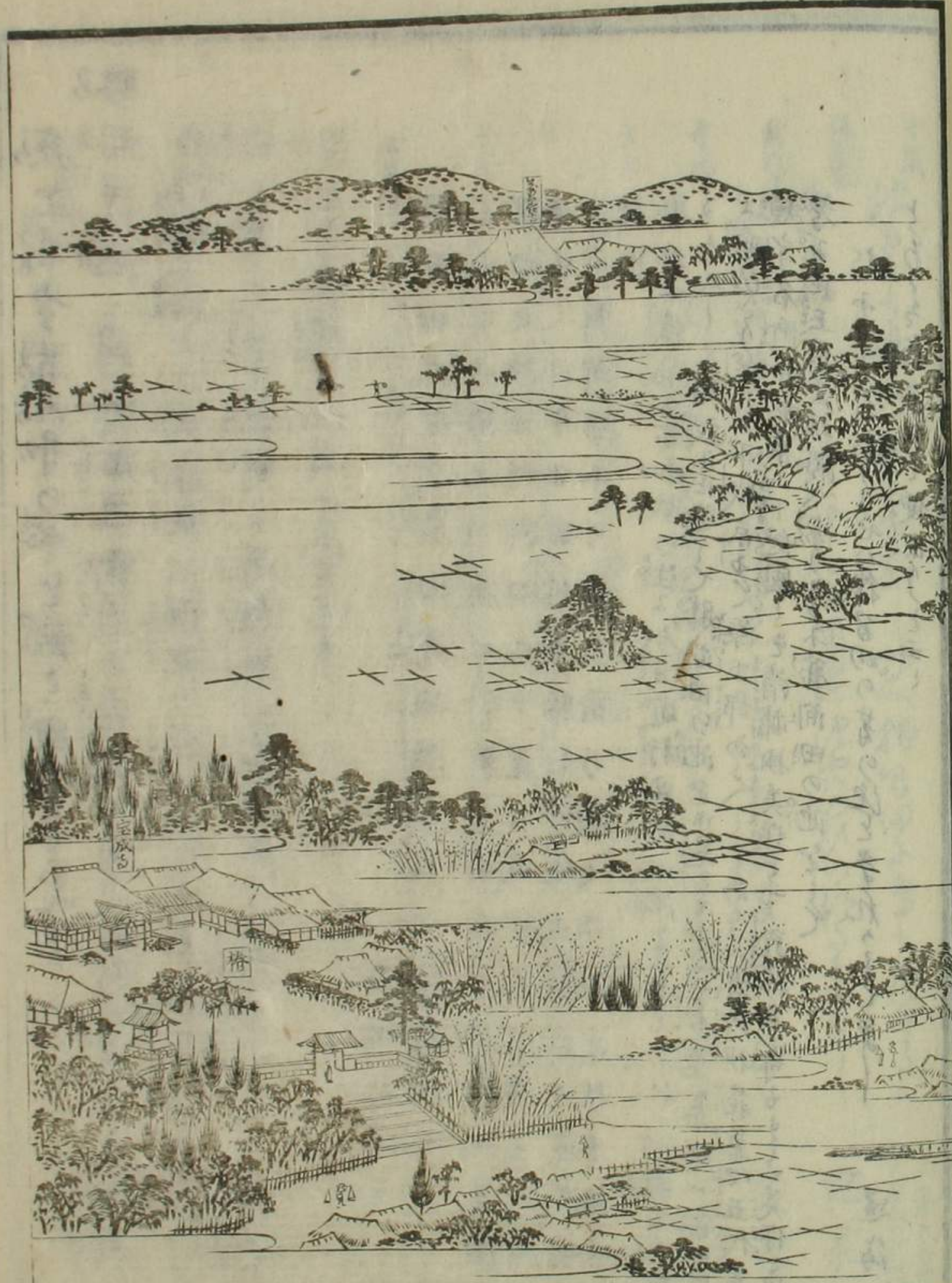
あふあふ千束
の池とも号く傳云文應元年庚申日蓮大士十九 年三
富木常忍り假る
所の法華堂よ入のひ一百日の間妙法論を講し群生を教導
ありし頃此所の池靈婦女と化し日く彼地よりりて大士の説法を
聴受し信心衆を越え一時彼婦女来り大士に向て云く妾今
尊者の法施を冠り一乘の真因を得んと願くハ大士手書の

あんえ聖
本意及び自の法号を賜はらんを乞大士乃曼荼羅を
又妙正との法号を授め婦女喜んで去人怪むと跡に隨ひ至
る此池辺より其婦女の姿を見失ふ然も其年忽然と一
傍の櫻樹の枝にかりてあり衆人奇とをこみ於て此池の靈なる
るを知らし妙正と号け後一社は奉まるとり 其婦女往還の道を曼荼
羅小路と字し或は蛇

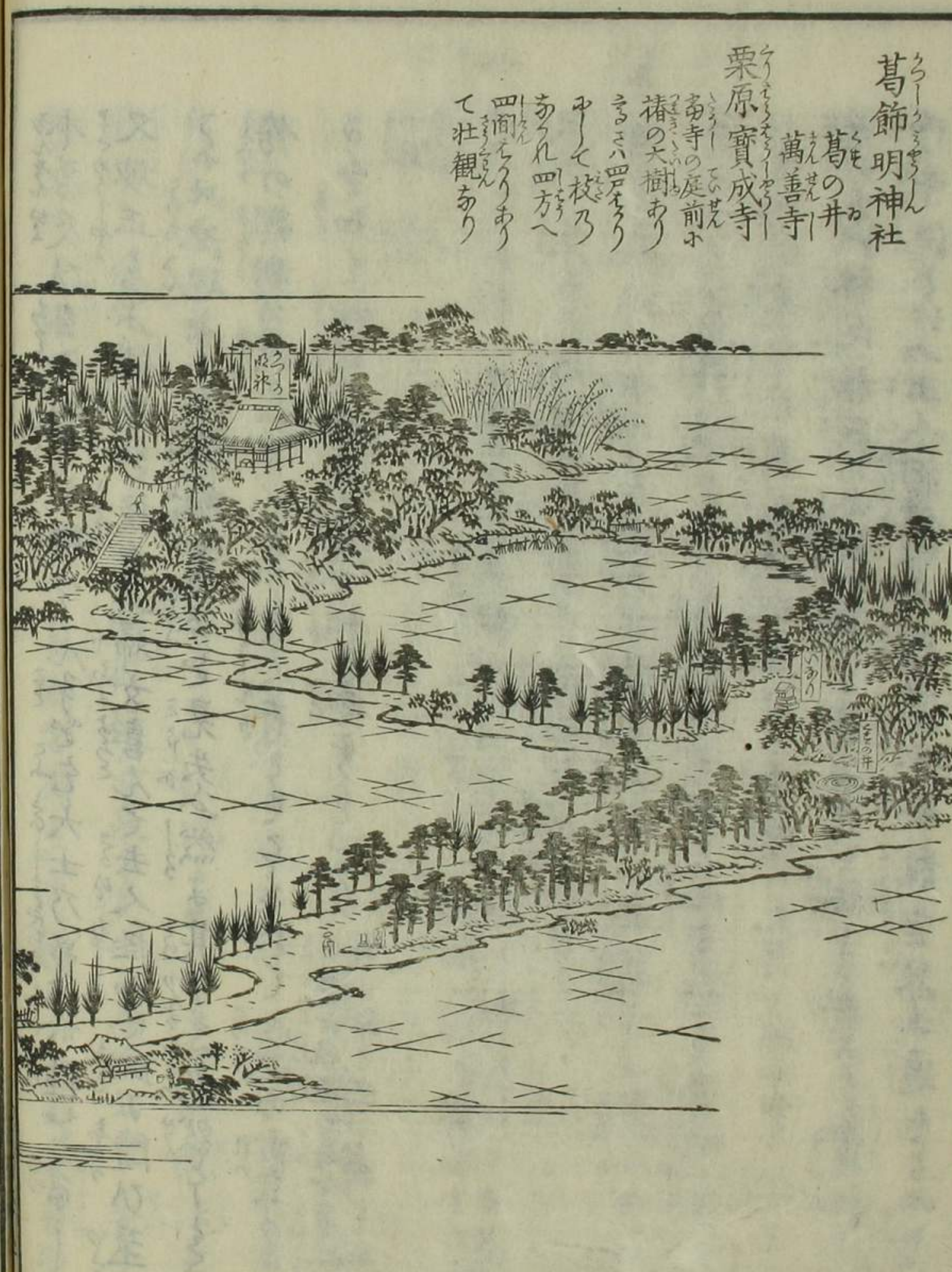
妙正大明神祠 同所あり或は燒神とも稱せり 庵瘡を患ゆる者祈あられん
念して験ありと云日蓮

葛飾明神社 中山より東の方栗原本郷の街道より左へ四町

をり入る叢林の中より葛飾の惣社と稱せられも祭神祥な
らむ同所真言宗萬善寺別當より祭禮ハ九月十五日あり社あり
東の方林間稻荷の小祠の傍に葛の井と稱する井あり當社此
浄手洗との土人相傳へく此井の水脈龍宮界不通と云瘧



葛飾明神社
 葛の井
 萬善寺
 栗原寶成寺
 高寺の庭前
 椿の大樹あり
 三つ八四をり
 中七枝乃
 あれ四方へ
 四間をりあり
 て壯觀あり



勝間田池
栗原本郷邑の
地あり故に
本郷の溜池と
号す

万葉集

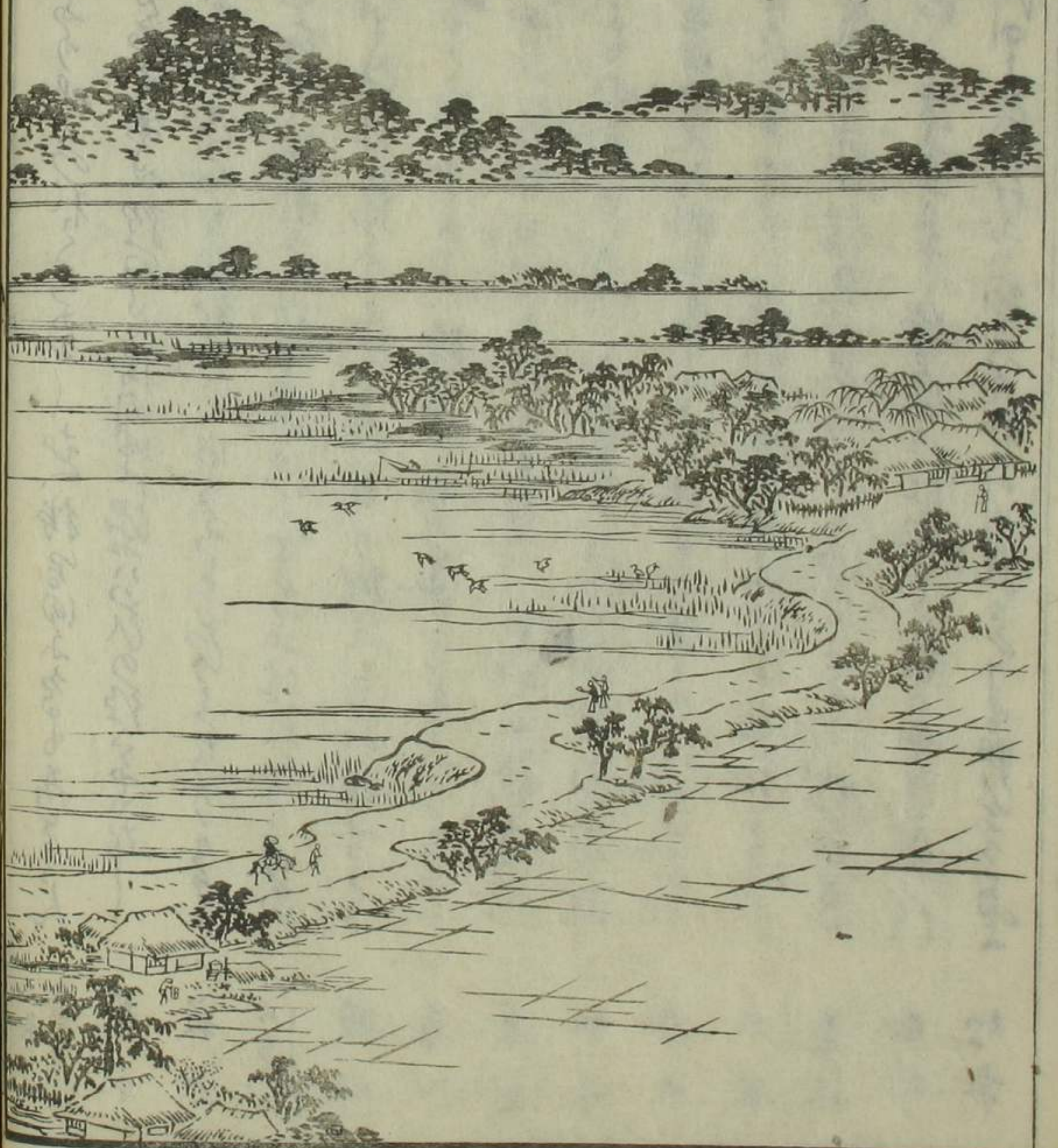
かみまき池

池

われ

ちちす

あし



あつみ

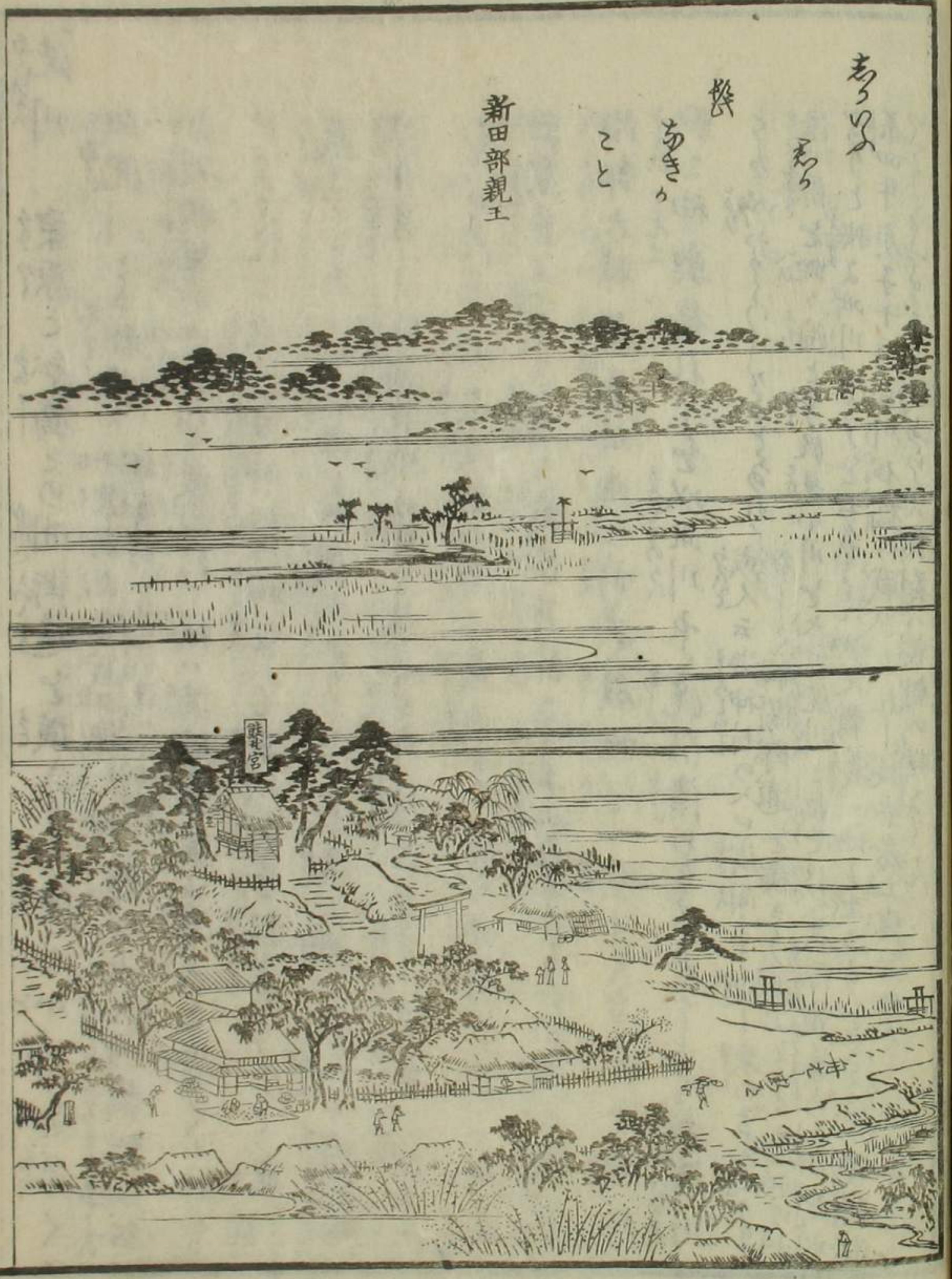
あつ

あき

あき

こと

新田部親王



洗川

栗原と船橋との間街道を横きりて流る小川を号く
血洗川とも称せり
夷大將軍の宣旨を蒙られ後其威勢実草木も靡くを
幕下はあつて度々の催促ありしは是に應せし故に頼朝卿
憤り甚しく船橋六郷の地を葛西三郎清重に給ひ清重此地に入
むとせしとも神人及び六郷の農民等三神の神輿を前より早居
西栗原より支へて防ぎ戦ひ其乱さし止らざりしに終に神官
治部大輔基義神輿の前より腹掻切て空しくありぬ時乃
戦ふ神輿穢れを以て此川を洗ひ清めしと云り血洗川
とを呼ぶなりと云り
或人云海神村の入口浅間より東の方の山より
流る源を蛇の淵と号し是は小川を大に洗川と稱すは云源頼義の太刀洗川
なりと按此川の源を云ふは又頼義の地に至るを云ふは頼朝治
承四年庚子十月豆州石橋の戦ひ敗れ安房上總を經て下総の國府に
ついであり疑わらざるに頼義の頼朝の謀りなり

阿須波明神祠

西海神村あり禪宗大覚院奉祀を安場羅

龍王を祀ると云 故に此地を海神 耕田と道路とを隔て海汀に向く
華表を建る九月日を祭祀の辰とす此日芋を食すと旧例とを

故に土人芋祭と号するなり 當社に小柴を祀りあり旅人と云
長途の安全を祈りまゐりしと云侍小奇林良材下総國阿取波宮とまゝは社の
神の誓ひあり小柴を立くわらうありと云と云

萬葉集 爾波奈加能阿須波乃可美爾古志波佐之阿例波
伊波々牟加倍理久麻豆爾

新千載 名寄 今もいふかへとあやむれありし宮に少柴を祀り 定為
後頼

石芋 當社の入口より里塚に云く柱古弘法大師東國化度の時日され及び
ありく是を許しうぬせり大師邪見の輩を敬導めん方便もその家の
傍の芋を加持して石とせしめしと云其芋四時とも不腐れしと云年々

生すといふなり



意富日神社
舊地

意富日神社初鎮座地

船橋驛舎の入口海神村御代川氏某

地あり日本武尊此海上中々八咫鏡を得多し伊勢太神宮

の正體と鎮座あり旧跡なりとの入今意富日神社の地より此

昔ハ零川よ作零ハ水の深きを以て訓義や日本武尊を導きし世此の海の

際を志せし神鏡を得せしあまの御孫の孫今猶連綿たり

夏見厨海神村の北の方あり今東夏見西夏見と唱へて二分

古伊勢神の神領あり意富日社の神主是を務たり

神鳳叙曰伊勢太神宮造替遷宮事曰食米處々

注文二所太神宮御領諸國神戸御厨所蘭神田名田

等合下總國見見御厨上分布三十段口入三十段一名船

橋二百丁神鳳抄其餘下總國相馬遠山形葛西猿蓑田神保等共合せ五箇

所より意富日神社傳より万葉集

爾保村里能可豆思加和世乎爾倍須登毛曾能

可奈之伎乎刀爾多氏米也母

かくよありハ古葛飾の早稲をとりて神ノ新嘗なり一りありと此和奇の
 らうらち此の早稲をとりて神ノ新嘗なり一りありと此和奇の
 忌まはしきあはれ我うのくんとあ人の来んつとあの方立せはく内へ入るん
 とやてふあはれとをたてていふ

船橋

船橋 驛舎なり海神村及び九日市場村五日市場村等の三邑の
 總名なり古の神領の地なり 舊名を湊郷と云と相傳往古

日本武尊東征の時此地に至りあひ海上より一面の神鏡をぬ
 あり 其地を海神 依て其地は神鏡を遷しき然る頃へ水無

月あはれ早打續官軍大なる尊其汚穢あり一りハ驗あり二二三
 日の間大雨降續官軍勢をゆるく竟は凶徒を亡し一り後湊

郷の辺洪水あり神鏡の宮所へ移通ふべき便なり一りハ船城
 浮ゆく橋とありあり此地名發るといふ

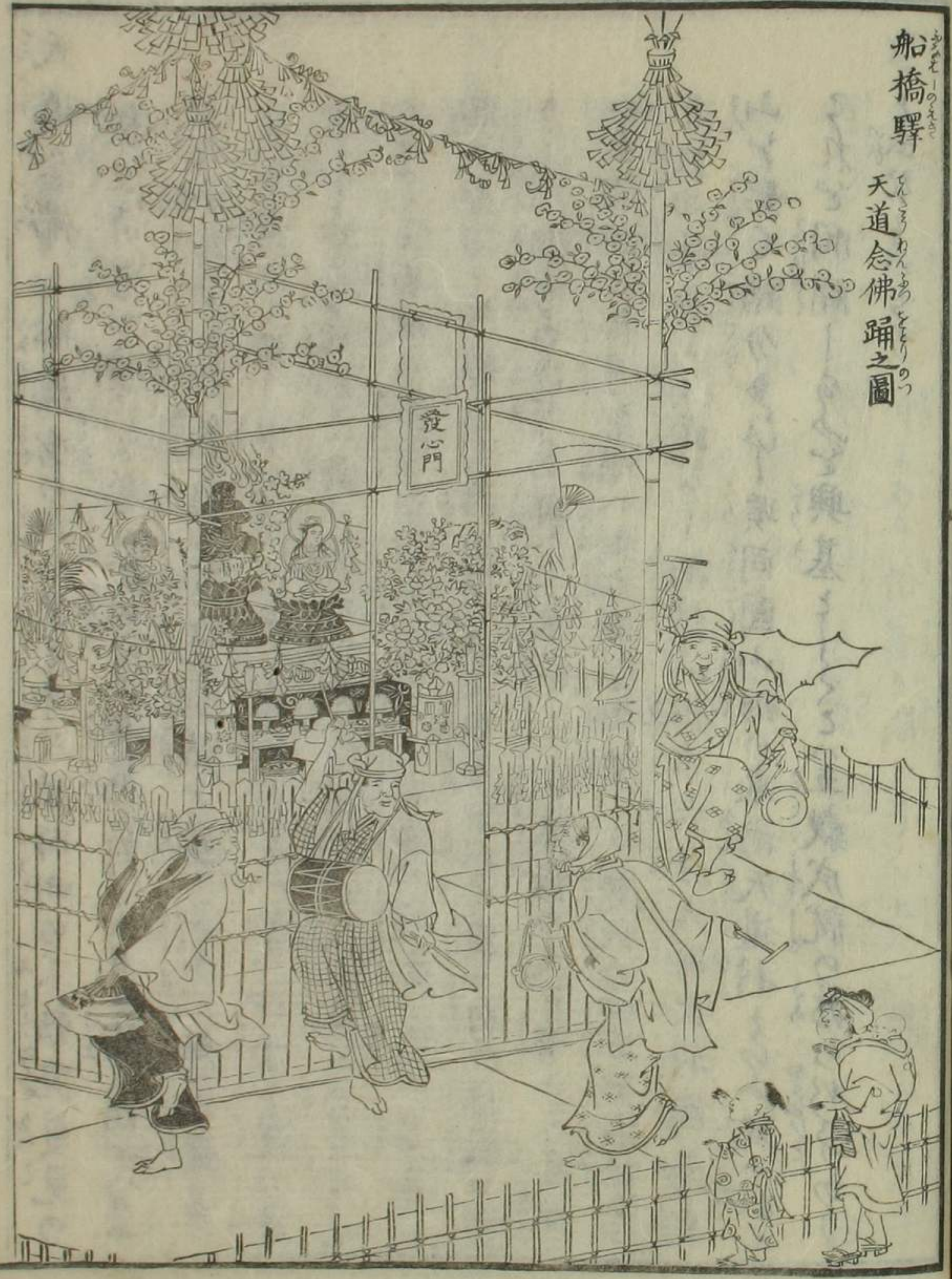
東鑑曰文治二年丙午三月十日 庚寅左典殿の賢息首服を如

催促を如へあはれき由とある条下は下総國船橋市厨院寺領と云

のくつきあり東海津知行の國々の内乃貢未済の注々家司等の注文を召下

船橋驛

天道念佛踊之圖



天道念佛

船橋宮の内の東光寺及漁師町の不動院夏見の
薬王寺等の境内に於て執りて每歳二月十六日始り同十八日
終る昔ハ一七日の間執りて堂前小土を以壇を築き竹を以柱と儀多
これを梵天と稱し其四方は四の門を開き四八柄の神幣を建注連
を引し各皆悉く諸の佛天を表し其内ハ大日如来の像を安し
奉ると一**百味の飲食を供養せり**其詰衆の道俗ハ各一昼夜比
間六度つ垢離して淨衣を着し白布を以て造る所の宝冠を頂
き三寶諸尊の序号を稱へて敬礼し六根懺悔の文を唱ふ又其間
中を弥陀の称号を唱へ鉦太鼓を打鳴し梵天の四方を右繞せり
身救回昼夜は間断なく相傳ふ往古弘法大師出羽國湯殿
山を始て踏分ちて頃同國山形の東南天道村との地に於て
これと開闢し其を興基とてこハ五穀成就の爲の地なり
と云なくハせり

遠く

船橋の沖にあり俗釜淵と号く土人の謠云昔平
将門の愛妾桔梗前将門亡びて後ハ流石は都へ歸らむも物
うらぐ船橋の里小暫しをこし終小此海底小身を沈りしと
なり此海の漁幸あり其魚の諸魚を淨膳料とて江戸へ運ぶ昔
大樹此地に至らせし頃より例やして今も廢せずとも又船橋太
神宮へも掛まありはとあり故は此辺の海濱と赤菜と浦と名つとも又船橋宮
社説は此海より産せしものなり中ハ海濱と赤菜と浦と名つとも又船橋宮
あり鯛の形ありと云船橋宮神廟の傍に海濱と映し自然に魚を産す
あり実ハ神徳四海に溢れ海濱に感應ありと云くありんと云
大峯山慈雲寺 同所二丁あり北の方新田あり五山派の禪窟
あり鎌倉建長寺第二世佛光禪師開基の精舎あり本寺
釋迦如来ハ行基大士の作取士ハ文殊普賢等なり昔ハ盛大の
寺院ありしハ永祿年間里見義弘兵火に罹りて灰燼と爲り
又此時當寺の鯨鐘をも國府臺の陣へ棄れしと謬り利根
川へ沈りしと今其處を字し鐘淵と号り國府臺の奈
下は詳なり
宝曆中徳巖とて禪僧
再ハ鐘を造るといふ



船橋
意富日神社

意富日神社

意富日古八日と比よ作る天正以來
台命およりて比を改らんとし

船橋驛上總海道

成田海道との岐道五日市場村に宮居す世に船橋太神宮

と称す延喜式内の淨神ありて關東一之宮と崇む神官大宮司

富氏奉祀せり

當社大宮司富氏の始祖、景行天皇第四の皇子五百城入彦尊あり天皇を
して船橋より下向なるといふゆゑに東國八千八村の縣主兼當宮の神官を司りし
より然るに仁平の頃荒木田滿國の舎弟兼國を養子とす其後基継の時又嗣
あきふ依りて千葉滿胤の子基胤を養子とす此時日月を以て家の紋と
せしう天正十九年辛卯大神君當社に奉指の頃神官富氏御紋の軍配
團扇より根引の若松を添て献りし其後上意よりて若松を軍配團扇を
家の紋とす隔年二月年始より八日例に任せ清枝大麻より根引の若松を添て献上
しなり登城をもとて永規とす

本殿祭神

天照皇太神宮
豊受皇太神宮

二座相殿

左八幡太神宮
右春日大明神

延喜式神名記曰下總國葛飾郡二座

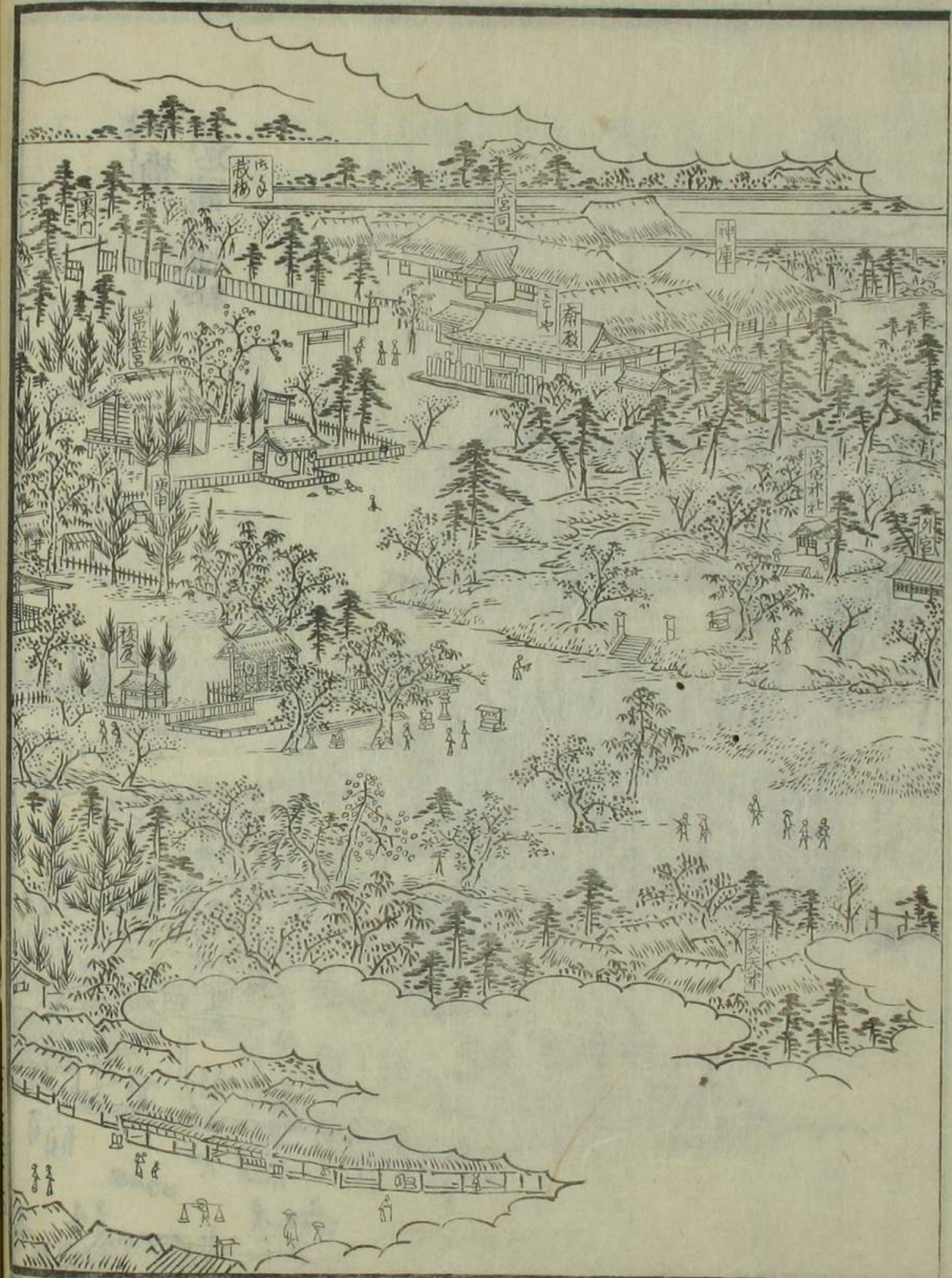
三茂侶神社曰意富比下總國葛飾郡二座

又同書曰五位貞觀五年五月二十六日戊子授下

又同書曰十三年四月三日己卯授同神正五



其二



又同書曰 同十六年三月十四日癸酉授同神後

神寶 叢雲御劍 長一尺五寸ありり来由ありと云も

神息劍 長一尺五寸ありり日蓮大士 木劍 野も同大士の御らあり

柄を柄す其所全うり

近衛帝宣尔 平元年辛未六月十日船橋六郷の

千葉介満胤神領寄附状 兼久元年己卯四月十六日船橋六郷の地を寄

限海西限洗川并 磐徳北限石枝路とあり 其餘應長應永永亨永祿文龜元龜

家集 建保六年十一月素還法師于時 下後國より入り

愚いものもそいつや久きれ天てつゆもやふまゝ〜ん 後余右大臣

按社記は実朝公寄附の御ありを以てわかれを納むるありし葉の某

將軍より代りたりし七日の間當宮より奉給すとあれども其葉の御あり

常盤御宮 本殿の右神林山の麓にたせぬ四方は階羅を繞らせり

東照大権現宮の御神影及び 大將軍秀忠公御木像日本武

愍敷伊勢守基治天海大僧正とあり御請なりとあり来由は其憚ありと

とあり 女集り廣前より四月十七日祭礼に都鄙より来りて歌舞を同夜近里の童

とあり 按初負脊の初徳指ありと云はる葉集葛飾早指を費すともあり

至り登形の新指を新當より取分置る習俗ありと云はる延喜式にも初徳の

あり文字荷前より依り波津本と訓江次第日荷前昔四方國より進御調荷前

取奉故三三荷前又三三美録にも新鏡を新當より取分置る習俗ありと云はる

之早徳二十文云云又後世の記は先徳を波郎と訓を其初徳と云はる

齋殿 同所大宮司の構は傍てあり 御饌殿 同所より御供

社記曰景行天皇四十年皇子日本武尊東夷征伐の勅をまり登向

其時海上より光を現し一ツの船の中は神幣を採添る弱木一面

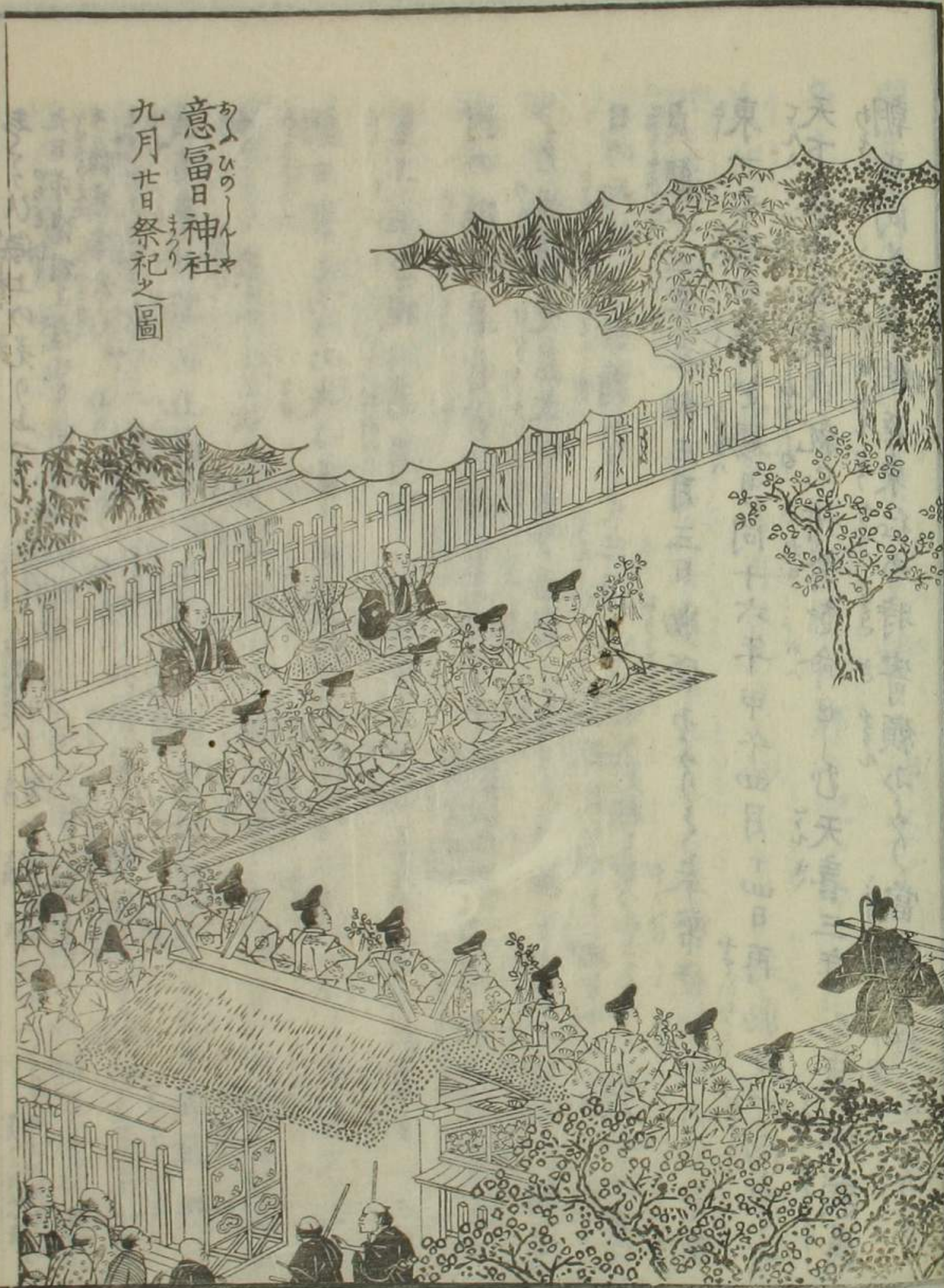
の神鏡の懸れあり尊是を得あり則大神宮の御正體と云はる

夏見郷は宮殿を建て崇まのりあり 其神鏡今猶當宮の御正體と崇め

夏見郷は宮殿を建て崇まのりあり 其神鏡今猶當宮の御正體と崇め

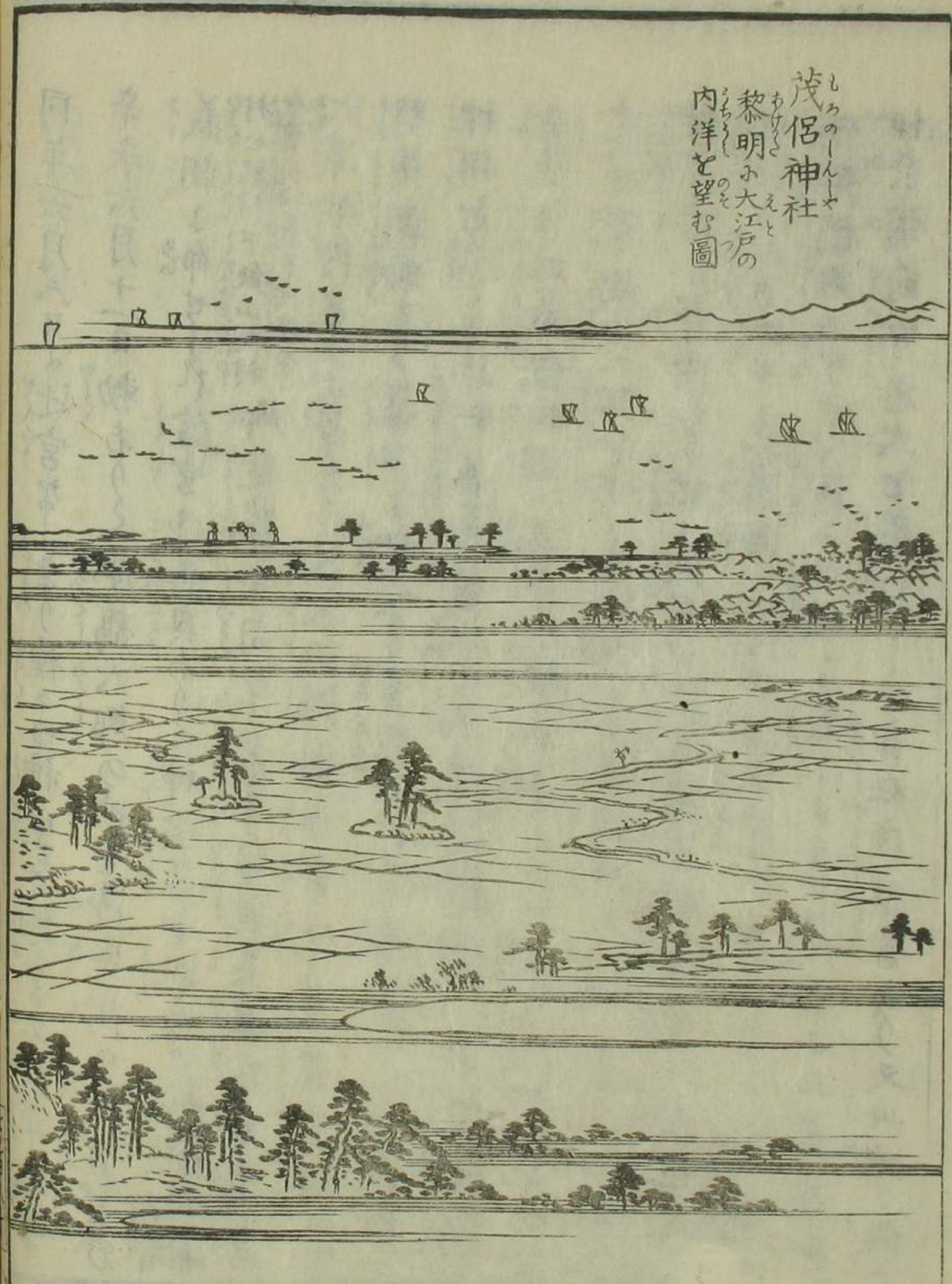
夏見郷は宮殿を建て崇まのりあり 其神鏡今猶當宮の御正體と崇め

あふひの
意富日神社
九月廿日祭祀之圖



あつひ海上の光りあつひの影を求めし者なきと云ふ事今も
九日市場村に存せり同時凶徒禍の初矢を刺し者なきと云ふ事今も
其後裔海神ありて今も其神ありて今も其神ありて今も其神ありて今も
我を是伊勢國五鈴の川上より天降る神あり今も其神ありて今も
等しく崇へると云云依尊其由を帝に奏しおひて伊勢太神宮を
朝日宮と名め夫を對して當宮を夕日宮と稱しおひて天皇第四の
皇子五百城入彦尊を以て船橋より下向あつひの東國八十八
村の縣主兼當宮の神官たりて當宮神宮其年新嘗の祭を行
つて後豊受皇太神宮を合祭しなりて二座とて又左右は八幡春
日の両神を勧請ありて三社と名め其新嘗の祭を今も清和天皇の
貞觀十三年辛卯三月三日勅願ありて奉幣使下向ありて
東一之宮の跡を賜り同十六年甲午四月十四日再勅使下向ありて
天下泰平五穀成就の祈念を命せしむ天喜三年乙未源賴義
朝臣同義家朝臣東征の時寄願ありて當宮を修造ありて

同年六月六日遷宮なり種々の神室を納り又仁平元年
辛未六月十一日勅ありて船橋六郷の地を沙寄附の院宣とて
義朝に命せしめ當宮を再興ありて神室を収る六郷の所謂
村七熊村下飯山間村御造宮の下司八千葉介常胤美濃前司清高
金曾木村夏見柳等なり荒木田滿國奉幣使たり基義神主の
大澤平内兼家等なり幕下より加へて肯仰あれとも應せり一ハ悉く
時頼朝卿より幕下より加へて肯仰あれとも應せり一ハ悉く
神領を打ちし刺基義腹切て失ぬ其後基義の
舎弟推及基継仙洞へ其由を歎奏上りて久永元年己卯四月
十六日實朝公へ詔を下し故は千葉満胤より昔の如く六郷の
神領悉く寄附あり然は天文以後東國争戦屢發一頃當宮は
神領も大方打し衰廢せんとせし天正十九年辛卯 台命小
依船橋郷の中より新小社領を寄しめ慶長十三年戊申
伊奈備前守忠次を奉行として宮社を造営あり又此地は假



しんのんや
茂侶神社
あけくさ
黎明大江の
ちのちのち
内洋と望む圖

伊弉諾を建させし礼時とてこふ入御ありし伊弉崇敬尤厚く
御武運長久の御祈禱を命せしむ始ハ神官富氏の家を假の伊弉
建のありし神官の家を同所田中とて地へ移し元の社地へ移り住らるる後伊弉を
官宮の伊弉ハ神官富氏へ賜りしなり再ハ元の社地へ移り住らるる後伊弉を
將領と唱へ宝曆十一年辛巳勅許ありし古往の例に任せ毎歳
鳳瀨は伊弉をなすりしなりぬ

當社の祭祀多き中ち正月十六日の伊弉神樂二月卯日の五
穀成就の神樂殊に九月廿日ハ大祭なり其式甚古雅なり
前の日ハ角力具あり此形ハ天正十九年辛卯

東照大神君當宮へ所奉宮の時 上覧ありしとあり 其餘の伊弉
茂侶神社 意富日神社の撰社中ち同所より六丁計を隔て

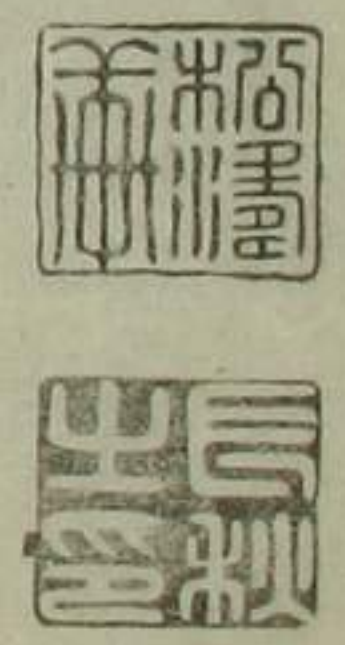
東の岡あり祭神ハ木花閼耶姫一座なり故に浅間山乃号
あり當社ハ延喜式内の御神中ち葛飾郡二座の中なり伊弉手
洗池あり今ハ民家の地に入 或人云茂侶神社ハ同郡小金領栗ヶ澤村に
ありし社司ハ交野氏祭神ハ日本武尊ありと云

三代實錄曰 元慶三年九月二十五日 壬子授下

此社地ハ海濱に臨たる砂山中に松樹繁茂を西南の方
低く前より南總の驛路を見下し後ハ岡續あり成田の街道
東北に繞る富嶽の白雪房總の翠巒筑波の紫霞も共に此地の
眺望に入りし風光最秀美なり例祭ハ六月一日より
柳宮より名木の根の若松ハ當社の
地より擇とて旧例とせしなり

江戸名所圖會搖光下畢

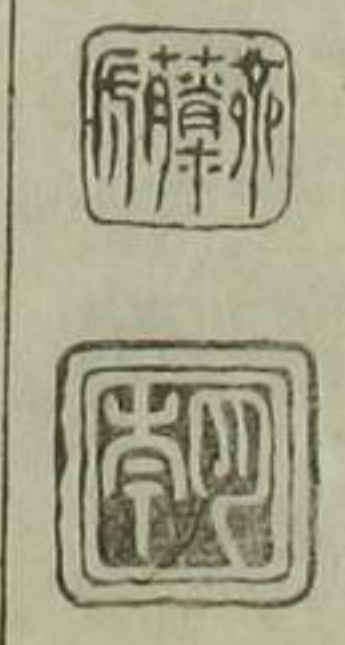
編輯 松濤軒齊藤長秋



校正 男 藤原縣麻呂



全 縣麻呂男 月岑幸成



畫圖 長谷川法橋雲旦



副刷 東都 佐脇伊三郎

朝倉伊八

宮田六左衛門

此は東都名所園會
加ら家世より三在采
徑よりあるとる之持
其跡を継ぎ孝志の
法より科より西美事
有為の好むあり

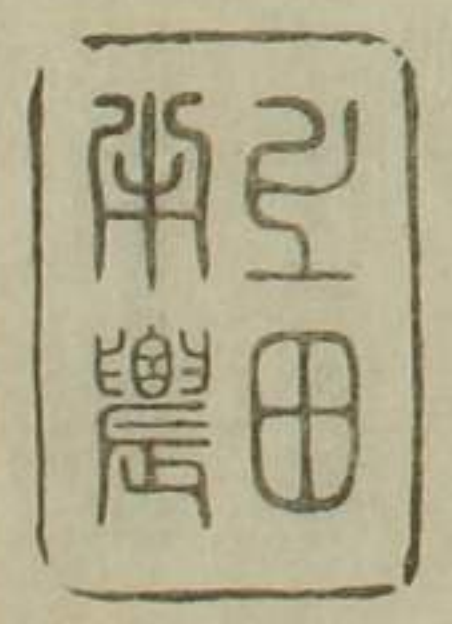
ほふ其聲をいふおのこ
ち何れ時年よりの時と
さるまゝいふ事をもいふ
なまゝの家いけまの思ふ
いま此の毎事事事
はつむのいふたぬいふ

自の製造火の油の
西のいふいふ本
燈乃光をいふ
をいふいふいふ
物乃本接合の部
をいふいふいふ

心加ふ事は 取らば此
等々 僅かなる交遊中に
あつた事 縁ふる事 爲
りたる 今更ニ 爲る
事 爲る事 爲る事 爲る
事 爲る事 爲る事 爲る

志は申され 事 爲る事 爲る
事 爲る事 爲る事 爲る
事 爲る事 爲る事 爲る
事 爲る事 爲る事 爲る

上田憲憲



荃齋盛義書



拾遺

江戸名所圖會

全五冊

齋藤月岑編述

近刻

長谷川雪旦画圖

東都歳事記

全四冊

全全

近刻

藤原縣麻呂遺稿

箱根 熱海

温泉名勝圖會

全三冊

長谷川雪旦画圖 近刻
同 雪堤補画

天保七丙申青陽

東都書鋪

日本橋南一丁目

須原屋茂兵衛

淺草茅町二丁目

須原屋伊



三都發

行書林

武家所圖會全

Y.

江戶日本橋通四丁目	江戶神田通新石町	江戶日本橋通二丁目	江戶今川橋本銀町	江戶日本橋通二丁目	江戶芝神明前	江戶淺草新寺町	江戶神田鍛冶町二丁目	江戶兩國吉川町	大坂心齋橋筋安堂寺町	大坂心齋橋筋唐物町	京都寺町通松原下
須原屋	須原屋	小橋通二丁目	永樂屋	山城屋	岡田屋	和泉屋	北島	山田	秋田屋	河内屋	勝村
佐助	源助	新兵衛	東四郎	佐兵衛	嘉七	庄次郎	順四郎	佐助	太右衛門	太助	治右衛門

